

---

# Eyes ~アイズ~

沙凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Eyes／アイズ／

### 【Zコード】

N4608A

### 【作者名】

沙風

### 【あらすじ】

世界は、封印する側・ホーリーナイツと解放する側・イビルナイツとで対立していた。世界はイビルナイツが解放した魔物で溢れ返ってしまった。そんな世界に生きるアスカ・シンクレアは一人の青年と出会い、ともにイビルナイツと戦う旅に出ることになる。第二部では新たな敵が現れ世界の流れは大きく変化していく。アスカは世界を救うことができるのだろうか？アスカと仲間たちが繰り広げるファンタジーです。

## 第一話～始まり～

「……やつと到着だな……まさかここに来るなんて思つてなかつたけどよ」

「そう言えばここは、あなたの故郷でしたね。それに到着するまで随分と時間が掛かりましたからね。収穫があればいいのですが

「ふふ、そうだな」

「さて、行きましょうか」

「アスカ～ここは、やめておいた方がいいよ。確かに何がありそつだけどさ～」

落ち着いた女の子の声がする。

「うつせえよ。なんなら一人で帰れよ。だいたい、クレアがここに行きたい、絶対何かあるつて言つたんだろ?」元気な男の子の声が狭い通路に響く。

「そつそうだけどお・・・」

そんな会話を続けながら、二人はこの「サンラド遺跡」の奥へ進んでいった。

暫く歩き続けていると内部には口の光が届かなくなり、辺りは真っ暗になつていた。

やっぱ地下は暗いな。そんなことを思いながらアスカは火を灯そうとした。すると、奥の部屋らしきところから光が漏れ出している。そつと部屋に近づき、中を覗き込むと黒い本を持った怪しげな男がいた。

「あれつてもしかして解放の書?」クレアが自信のなさそうに言つ。「多分そうだろうな。つまり、イビルナイツってことだ」アスカがはつきりと言つとクレアがおどおどしながら、戻ろうよつと言つたがアスカは軽く聞き流した。

「あいつが何をしているのか、確認しておいた方がいいはずだ」ア

スカは少し興奮気味だつた。

呆れたクレアはアスカの腕を掴み、無理やり連れて帰らうとしたが、アスカがその手を振り払つた。

その勢いでクレアが、ドスンッと鈍い音を響かせながらしりもちをついた。

「誰かいるみたいだな・・・仕方がないここは諦めるか」イビルナイツの男がそう言つと手に持つていた黒い本を開き、開いたページに手を置き、魔力を込めた。すると、本から封印されていた魔物が飛び出した。

「さあ、そこにいる者を始末しておくんだ。あとは貴様らの自由にするがいい」そう言つと魔物たちはアスカとクレアに襲い掛かつてきた。

「やつやばい！！逃げるぞクレア！！」

二人は全力で走つた。それを魔物たちが追いかける。

「では、ご機嫌よう・・・」にやつと微笑を浮かべながらイビルナイツの男はすーっと闇に消えていった。

「だから戻ろうって言つたのよ！！だいたい、いつもアスカは・・・

「つとクレアが言いかけたその時、広間に出了。すると先回りしていた魔物たちがアスカとクレアに襲い掛かつた。アスカがふと横を見ると魔物がいない通路があつた。が、魔物の方が速かつた為、その通路に辿り着けそうにはなかつた。

「ここまでか・・・」アスカが諦めかけたその時、目の前の魔物が二つに割れ、ボトッと倒れた。

「えつ！？」

「ケガしていないよな？」身長に合わないくらい、大きな剣を持った男が言つた。

「はっはい！大丈夫です」アスカとクレアが同時に言つた。

## 第一話～覚醒～

「その二人を頼みますよ、ロベルト」槍を持った青年が言った。  
「ロベルト……？」聞き覚えのある名前だった。その名はアスカ  
がまだ幼い頃によく遊んだ4つほど歳の離れた友人の名だった。だ  
が、はつきりと顔を見た訳でもなかつたのでアスカは何も言わなか  
つた。

「わかつた、そつちはお前に任せるよ」

「では、遠慮なくいきますよ。皆さん少し下がってください」そう  
槍を持った青年が言いつと同時に「百烈乱舞」つと声が響き渡る。す  
ると辺りの魔物が一掃された。しかし倒しても倒しても魔物が出て  
来できりがない。

「くつ……きりがありませんねえ。しかし何故こんな所に一般人が

？」

「どうやらそんな話をてる場合じゃねえみたいだ。この戦闘でこ  
の遺跡自体の崩壊の可能性があるぞ」

「そうですね。目的の物も手に入りましたし、これ以上戦闘しても  
意味がないでしよう。私が呪文で道を作りますので合図と同時に駆  
け抜けてください」その場にいた全員が頷いた。

槍を持った青年が詠唱を唱え始める「燃え上がり爆炎、灼熱の剛火」  
「バーストフレイム……」

燃え盛る爆炎と激しい爆風が辺りの魔物吹き飛ばした。そして一筋  
の道が現れた。

「今です。走ってください……」その掛け声とともに一同は全力で  
走り出した。

「なんでこんな田にあわなきやいけねえんだよお……」アスカが  
面倒そうな顔で言つた。

「文句をいうヒマがあつたらもつと速く走れよ～」

「わかつてゐよ。つたく散々な一日だ……うつうわつ……」

「いてえ」と叫う声が聞こえたと同時にクレアが振り向くとアスカ転んでいた。

「なつなに転んでるのよー！」クレアが焦りながら叫び。

「やつやばいーーここで死ぬのか？」アスカが諦めたその時、ロベルトが大声でアスカに怒鳴りつけた。

「ボケツがそんなこと言つてねえでさつさと立つて走れーー！」  
カキンツ・・・剣が弾かれた時の音が響いた。とても嫌な感覚がアスカの胸を過ぎる。

ぼとつ・・・それに続くように何かやわらかいものが地面に落ちる音がした。恐る恐る音がした方を見るとロベルトが立っていた。

「大丈夫・・・か？」弱々しい声でロベルトが尋ねてくる。その時ふと見えたその顔は紛れもなくあのロベルトだった。バタッとロベルトは崩れるように倒れ、アスカが駆け寄る。

「ロベルトーー！大丈夫かーー返事してくれよおいつーーなあわかるか？俺だよーー！アスカだよーー！聞いたら返事してくれよーー俺はいつもロベルト・・・お前に迷惑をかけちゃうなーー！」

アスカが目に涙を浮かべながら叫んだ。するとロベルトがゆっくりと口を開いた。

「・・・わかつてたぜアスカ。最初に会った時にあのアスカだつて気が付いてた。大きくなつたなあアスカ」微笑みながらロベルトが言った。ロベルトはアスカをかばつた際に、魔物に右腕を切り落とされてしまったのだつた。重症だつた。血が勢いよく吹き出る。

「バカツ死んじまうみたいなこと言つてんじゃねえよーー止血すれば何とかなるからーー！」

「あわりい。俺もまだ死ぬと決まつた訳じやないもんな。」

そう言うとゆつくりとロベルトの目が閉じた。

「ロベルト？おいつロベルトーー！」アスカが問い合わせたが返事はなかつた。それを泣きながらクレアが見守り、槍を持った青年がクレアに先に行くように叫ぶ。がクレアは動こうとしなかつた。アスカの手や服にはロベルトの血がべつとりとついていた。

「・・・おい・・・ロベルトにはな・・・親父より優れたホーリーナイツになるつて夢があつたんだぞ・・・その為に沢山辛い目に遭つて、それでも乗り越えてここまで頑張つてきたんだぞ！…」

アスカがロベルトを抱えたまま言つた。

「ロベルトの夢を返せえええ！！！」勢いよくアスカが魔物の方へ突つ込んでいった。

「危険です！！やめてください！！」槍を持った青年は大声で言つたが激怒したアスカの耳にはその言葉は入らなかつた。

「だありやあああああ！！！」一番手前にいた魔物の顔を思いつきり殴つた。そして次の瞬間アスカが手のひらを魔物達がいる方にかざした。

「うつうわああああああああああああああ！！！」アスカの叫び声とともに手のひらから激しい衝撃波のような力が炸裂した。あまりの威力に魔物どろか辺りの壁まで消し飛んでしまつた。

「ぐつぐああああああああああああああああ！！！」アスカが魔物のような声を上げていた。

「こつこの力は超波動・・・」槍を持つた青年がつぶやくように言つた。

「しかしこれは、怒りによる覚醒。このままで、こちらも魔物のようになされてしまつ。それに先ほどの超波動でこの遺跡自体が崩れかけています」重い口調で槍を持った青年が言つた。

「ゆるさねえ！！！全員殺す・・・コロス・・・ころ・・・」狂つたアスカがそう言い掛けた時、クレアがアスカにぎゅっと抱きついた。

「もうやめて・・・アスカ・・・」静かにクレアが言つた。

## 第三話～蒼き瞳～（前書き）

「こんにちは。沙凪です。ついに初小説が連載されました！…今でも楽しく小説を書いています。さて、前回の話ではアスカに秘められた力が目覚め始めました。しかし、力が暴走し、暴れだしたアスカ。それをクレアが止めようとした…この後は第三話で。ではどうぞ！」

## 第二話～蒼き瞳～

「ゴメン……クレ……ア」アスカはそう言って倒れた。

「アスカっ！！しつかりしてつ！！ねえアスカっ！！」突然アスカが倒れたのでクレアは少しパニックになっていた。

「大丈夫です。慣れない魔法を使つた為に体力を普段より多く消費したんでしょう。暫くすれば目を覚ます筈です。それより今は、ここから脱出することだけを考えてください」槍を持った青年は冷静に言った。

「私がロベルトを、あなたは彼を。さあ急ぎましょう……！」

「…………」

「おや？目が覚めたみたいですね。……アスカさん。」そこにはロベルトと一緒にいた青年がコーヒーを飲みながら本を読んでいた。どうやら助かつたようだ。クレアが、既に自己紹介やらお礼やらを済ましたらしくその青年はアスカの名前を知っていた。

「あんたは……魔物に襲われた時に助けてくれた……人……か？」アスカは覚えていた記憶を頼りに、様子を窺うように言った。

「はい。申し遅れました。私はホーリーナイツ第三戦闘部隊所属、地位は部隊隊長及び准将。ルーク・レオンハルトという者です。」

ルークはかなり有名であった為、アスカでさえもその名に聞き覚えがあった。

「ルーク……てことはあんたが『蒼龍のルーク』か。蒼き瞳を持つ者の右腕に聖なる龍は宿る、か」アスカがつぶやく程度に言った。この世界ではルークのように蒼い瞳と右腕に龍のようなアザを持つ人間は、歴史にその名を残していると言う事実があつたのだった。そして現在ホーリーナイツをまとめている者、つまり現在ホーリーナイツで最も地位の高い『ダーヴア総司令官』もルークと同様、蒼い瞳と右腕に龍のアザを持つている者一人だった。

「よく存知ですね」そのとおりですよ」ルークはにこつと笑いながら言つた。それがとても嫌味な笑みに見えた為か、アスカは少しムカツとした。

「私たちは任務でこの地方にある封印の触媒の一つ『神槍パラノーム』を入手しにきました。上層部から頂いた情報によれば、サンラド遺跡にあるようでしたのでそこへ向かつたら偶然にもアスカさん達に会つたという訳です」ルークは相変わらず嫌味な笑みを浮かべながら喋る。

「それで目的の物は手に入つたのか？」ルークは軽く頷き、コーヒーを一口飲んだ。

「あつそうだ！！口ベルトはどうなつたんだ？」アスカが尋ねると、ルークは嫌味な笑みではなく、仲間の無事を喜ぶ優しい笑顔で答えた。

「彼なら心配ありません。すっかり元気になつてあなたよりも元気になつてますよ。ただ・・・

「ただ？」

「・・・彼の右腕はもう使い物にならないそうです残念ながら・・・

「ルークは言つた。

「俺のせいで・・・俺に・・・俺にできることはないのか？」

「口ベルトはあなたと話がしたいそうですよ。彼の部屋は、この部屋の隣の部屋です」

「わかつた。口ベルトの所に行つて来るよ。クレアが来たら口ベルトの所へ行つたつて伝えておいてくれ」アスカはルークが頷くのを確認し、部屋を出て行つた。

そしてルークはまた本を読み始めるのだった。

## 第三話～蒼き瞳～（後書き）

読者の皆さん。第三話お楽しみいただけたでしょうか？さて、『ルークに話を聞き、ロベルトの部屋へ向かうアスカ。そこでアスカは人生を大きく左右する選択を迫られる。』次話「～選択～」お楽しみに。

## 第四話～選択～（前書き）

前回、無事に『サンラード』に帰つてくることができたアスカ。目が覚めるとそこには、槍を持つ青年ルークがいた。彼の話を聞き、ロベルトの話を聞きに行くアスカ。ロベルトの話とは一体・・・

## 第四話～選択～

部屋を出たアスカはロベルトの部屋のドアに手をかけた。

「話つてなんだろうな。もしかして説教かな？俺のせいでロベルトはケガしたんだもんなあ」

アスカはそんなことをつぶやきながら、ゆうくじと田の前のドアを開く。

「・・・おっ！やつと来たか～来るのが遅いからあのまま死んじまつたかと思ったぞ」

ロベルトは、笑いながら言つた。しかし、その笑顔には少し悔しさが紛れていった。

「あつあのさつ話つて何？」

「いやさあ～お前の事だから『俺のせいだ～』とか言つてゐんじやないかな～って思つててさ」

図星だ！～ほんの数分前に言つた言葉だ。アスカは心の中で驚いた。「その顔はどうやら俺の言つたとおりだつたかな？」相変わらずロベルトは笑つている。

「そんなことないよ～さつ、本題に入ろうぜ」無論棒読みだつた。まだ笑つてゐるロベルトは少しずつ話を始めた。

「もう聞いたかもしけないけどよ、俺の腕さ、肩から落とされちまつたからよ使い物にならないんだとか」その言葉にアスカは何も言い返せなかつた。

「俺の夢知つてるよな？俺のオヤジ以上に優れたホーリーナイツの『英雄』になるつてやつ」

ロベルトの父親は、元ホーリーナイツ第五戦闘部隊部隊長であり、『英雄』と呼ばれた戦士だつた。

しかし、六年前任務中に殉職してしまつた。それをきっかけにロベルトはホーリーナイツに入隊することを決意したのだ。アスカは頷き、話の続きを聞き続けた。

「けどよ、もう剣が握れないんだ。この手ではもう……」

「…………」

「だからさ、アスカ。俺の代わりに『英雄』になつて欲しいんだ。俺の代わりにイビルナイツの奴らぶつ倒して、魔物達もぶつ倒して世界に穏やかな時を……」ロベルトが話している途中でアスカがしゃべった。

「いやだっ！俺は……俺は……」アスカが何かを思い出すような言い方で言った。

実は、アスカの父親もホーリーナイツ戦闘部隊に所属していたのだ。しかし、ロベルトの父親同様、同じ任務で亡くなっていた。それ以来、アスカはホーリーナイツを自然と避けていた。

「お前の気持ち、わかるよ。だけど、俺の気持ちもわかつて欲しい。急がなくていい、ゆっくり考えてからお前の返事を聞きたい。決心がついたら俺のところへ来てくれ」「

その後、部屋を後にしたアスカはお気に入りの芝生の生い茂る丘にいた。ここは砂漠の町なのだが、なぜかこの場所だけ緑があるのだ、オアシスと言つたところだろう。

「父さん……俺、どうしたらいいのかな……」

「ああ～～やつぱりここにいたあ～～」クレアが後ろから声を掛けてきた。

「なんか用か？」考え方をしていたせいか、妙に冷たい反応だった。「ひつど～い、心配して搜してたのに。どうせ何か考え方でもしてたんでしょ？」

「・・・うん。」

「やつぱりなあ～。今日はもう遅いし、明日は学校あるんだから帰ろうよ、ね？」「

「そう、だな……」

帰宅したアスカは遺跡に行つた事やら帰宅時間が遅いやらと母親に1時間ほど叱れたのだった。

起床したアスカはいつもどおり着替えを済ませ、学校へ登校した。

「なんかいつもと違うように感じるな、日常が」

「おはよっアスカ！！」何故こんなに元気なんだ？とアスカは思つた。

「今日学校終わったら私に部屋に来てねえ」「

アスカは曖昧な返事を返し、学校へ向かつた。

学校ではアスカがクレアとイチャついてるなど、アスカには勿体無いなどそんな話が絶えなかつた。

クレアは男子受けがよく、大人っぽさが魅力的らしい。しかし、アスカはクレアの髪の毛の色のほうが好きだつた。自分でもよくわからぬのだがあの銀髪のサラサラ感がいいとか。

無論それどころではないアスカにとつてそんな話は耳に入らなかつた。それどころか授業すらはいつていない、いつものことなのだが。学校も終わりアスカはクレアの家に行き、クレアの部屋のドアを2回ノックし、部屋に入った。クレアは自分のベッドの上にちょこんと座つていた。

「遅いってば！！」ムスつとするクレアにアスカは謝つた。

「なんか用でもあるのか？」アスカは急かすように言った。

「ホーリーナイツに入らないか？つて言われて迷つてるんでしょ？」

「私聞いてたんだあの会話」

「…………」アスカは少し黙つたまま窓の外を見つめた。

## 第四話～選択～（後書き）

クレアに誘われ、クレアの部屋に訪れたアスカ。クレアと相談し、ついに決断したアスカ。果たしてアスカの返事は？次回『～決断～』お楽しみに。

## 第五話～決断～（前書き）

放課後クレアに呼びだされたアスカ。クレアに悩み事を相談し決心する、ロベルトへの返事はどうなるのか？

## 第五話～決断～

「ねえアスカ。アスカの気持ちはどうなの？」黙つているアスカにクレアが問う。

「俺は・・・わからない。正直言うとどうすればいいのか、俺自身にもわからない」

「アスカのお父さんは任務で死んだ。だから自分もそうなっちゃうんじゃないか。自分も死んじゃうかもしない。だからホーリーナイツに入る事が怖い。そうでしょう？」

「・・・・うん・・・」

「でもあなたを今必要としている人がいる。ロベルトがあなたに、アスカに頼んだ理由わかるでしょ？ロベルトがホーリーナイツに入ることを拒んだあなただから、親友だからロベルトはあなたに頼んでるのよ。わかるでしょ？」クレアは泣きそうだった。

「俺は、あいつの夢を奪った。そんな奴にあいつの夢を背負うなんてできないよ」

「でもアスカがロベルトを止めたのは、ロベルトを死なせたくないからでしょ。それは、ロベルトだって同じだよ。ロベルトだって誰も死なせたくないから、イビルナイツと戦うことを決めたんだよ。自分が戦つて、アスカを、皆を守りたかったんだよ。だから、今度はアスカが皆を守つてあげる番なんだよ。私も、アスカが挫けそうになつたり、苦しくなつたり、辛くなつた時は支えてあげるから、助けてあげるから、一緒に世界を守ろう、ね？」その言葉はアスカの心にぐつと来た。

アスカは無言のまま部屋を出ようとした。

「アスカ！！！」クレアが大きな声を張り上げた。するとアスカは首だけを振り返らせ言った。

「ば～か、お前なんかじゃ支えきれねえーよ。ロベルトのところに行つて来るよ、それで言ってやるよ『俺に任せぬ』ってな」

とアスカは笑い部屋を出て行つた。

「…………告白だったのに…………」つとクレアはアスカが出て行つた後、ボソつと言つた。

誰かが勢いよく走つてくる。バンッ！ドアが開くとアスカが入つてきた。

「よつ！決まつたのか？」ロベルトが真剣な眼差しで問い掛けた。  
「ああ、もちろん。俺はホーリーナイツに入る」アスカはロベルトの問ひにすぐに答えた。

「俺に任せろよ！俺が、ロベルトのオヤジさんを超えた英雄になつてやるからよ！！」

アスカの覚悟は本物だつた。ロベルトはホッとした顔でルークを見た。

「それはよかつた。私もロベルトがいなくなつてしまつて暫く任務を一人でこなさなくては、と思いましたよ」さらつとルークが言つた。出ました必殺『嫌味な笑顔』心の中でアスカがつぶやいた。

「そうだつアスカ。これお前にやるよ！！俺からの餞別だ受け取れ」ロベルトはそう言つと壁にたてかけてあつた、大きな大剣をアスカに渡すようルークに言つた。

「これつて、ロベルトの父さんの形見の剣なんぢゃないのか？そんな大切な物もらつていいいのか？」

「いいんだ。もう俺には必要ない、それにこの剣だつて飾られてるより使われてる方がいいだろ」

「でつでも……」アスカはロベルトに悪いような気がした。  
「受け取つてあげてください」ルークがそう言つとアスカが剣を握り、ロベルトに言つた。

「ありがとう、ロベルト」

「大刀『竜王』……」ボソッとロベルトが言つた。

「え？」アスカにはその言葉がよく理解できなかつた。

「その剣の名前、大剣つて言つてるけど大刀に近いんだそれ」ロベ

ルトは笑つた。

「へえ～。じゃつよろしくなつ『竜王』！！」アスカは元気よく挨拶した。

すると、ルークがポケットから眼鏡を出し、それを掛けてクイッと中指で持ち上げた。

「そういえば、ルークって眼鏡なんか掛けてたつけ？」

「えつはいまあ氣分で掛けたり掛けなかつたりですよ。明日から1週間あなたに戦闘の基礎を教えるには、この方がそれっぽいと思いまして」ルークがそう言つとロベルトは横で笑つている。

「じゃあルーク、アスカをビシバシ強くしてやつてくれ。まあなんだ、できることならそこの窓から見えるところでやつてくれ、アスカのやられつぶりが見たいからな」ロベルトは言いたい放題言つてまた笑い始めた。こうしてアスカの特訓が始まるのだつた・・・

「アスカ・・・頑張つてね」クレアがドアに手を触れながら、中に入いる三人には聞えないくらい小さな声で言い、その場を立ち去つた。

## 第五話～決断～（後書き）

ホーリーナイツに入り、ルークとともに旅をすることに決めたアスカ。出発の前に修行することになったアスカは乗り越えることができるのだろうか？そしてどんな修行なのだろうか？次話『～旅立ち～』

## 第六話～旅立ち～（前書き）

ルークに基本戦術を学ぶように言われたアスカ。そしてルークと訓練することに。

## 第六話「旅立ち」

家に帰ったアスカは、親に入隊することを告げ色々と言われたがなんとか許しを得た。

「ああ～～どんな訓練するのかな。やっぱ大変なんだろうな・・・まつ頑張らないとな！！」

そう言ってアスカは、明日の訓練に備えて眠りについた。

「さて、始めてもいいですか？アスカ君」

「いつでもいいぜ」

翌朝になり、いよいよ訓練が始まった。

「まずは、構え方を教えます」

「おう！！教えてくれ」

「私と同じ体制をとつてみてください」

「いっこうか？」

「もう少し脇をしめてください」

この日は、構え・受身・防御・その他の戦闘知識を教わり終了した。三日ほど、同じような内容でルークと修行したアスカ。そこへロベルトが付き添いの看護婦と歩いてきた。

「どうだ？しつかりと身についているか？」

「まあ最初に比べればよくなっていますね～まだまだ未熟ですけど」

「うつせえな～まだ始めたばかりなんだから未熟で当然だろう～～」

「じゃあそろそろあの技教えてみるか？」

その言葉にアスカは、新たな楽しみを感じた。

「あの・・・技？」

「そう。俺とルークの共同開発の技だ！！その名も『龍波』だ！！」

「ならわざとやらうぜーーーさくっとその『龍波』つてのを覚えてどんどん強くなつてやる」

アスカは、すっかり強気になつていた。

「まあそう慌てないでください。今から技の説明をしますから。簡単に説明しますと、剣、つまり『竜王』にあなたの『魔力』を込めて、その込めた魔力を斬撃として飛ばすんです」

「おお～なんかよくわからんねえけどすげえ～！！」

アスカは、はしゃいでいたが事の重大さにまだ気付いてはいなかつた。なぜならアスカは呪文や魔術を自分の意志では使つたことなどなかつたのだから。

「アスカ魔術とか呪文使えるよな？」

確認の意味を込めてロベルトが尋ねると、アスカはそんなもの使つたことありませんと答えた。

「仕方ありませんね。とりあえずアスカ。魔術と呪文の違いがわかりますか？」

「いや、よくわからない」

アスカはルークが自分のことをアスカって呼び捨てで呼んだっと思ひながら返事をした。

「はあ～。では、簡単に説明します。魔術と呪文の違いは、発動条件と魔力の消費量です。魔術は術の名前を唱えるだけで、術を発動することができます。ただ、魔力の消費が大きい為、頻繁に使用すると魔力が底を尽き戦闘は愚か、動くこともできなくなってしまい、最悪の場合死に至ります。それに比べ、呪文は魔力の消費が少なく、長期戦に向いています。しかし、呪文を発動するには、詠唱と呼ばれる歌を詠わなくてはなりません。また、歌に込められた意味をきちんと理解しないと呪文は発動しません。それに、詠うことで隙が生まれやすいので個人戦は向きません。まつこんなところですね。わかりましたか？」

アスカは、なんとなくルークの説明が理解できた。

「なんとなくだけど、わかつた。で、それがどう繋がるんだ？」

「この間の件でわかつたのですが、あなたは体内に大量の魔力を持つていいということがわかりましたので、魔術を発動する感覚で『龍波』を覚えてもらおうと思います」

「具体的に何をすればいいんだ？」

「ここに昨夜私が作ったロベルト人形があります。これを刀身を触れずに一つに斬つてください。つまり『龍波』で斬るということです」

「なんで俺の人形なんだよ」

「まあ細かい事は気にしないでください。さつアスカ頑張つてくださいね」私たちはそれが終わるまで、何も教えることはないので。では、頑張つてください」

そう言つて、ルーク達は帰つてしまつた。

「よつしゃあ……わくつと終わらせてやる」

アスカはそう言つて修行に集中した。

三日後クレアがアスカの様子を見よつと先ほど作つたお弁当を持って歩いてきた。すると、修行をせずに、座つているアスカの姿が見えた。

「何サボつてるの～ルークに言つつけちゃうよ」

「サボつてる訳じやねえよ。どうして『龍波』が発動しないのかわからないんだ。ちゃんと集中して刀身に魔力を込めてるのに

「ねえ～ちょっとやつてみてよ」

クレアに言われてもう一度やつてみるアスカ。

「魔力を刀身へ・・・はああ・・・だりやあああー!!!!」

またも空振りに終わった。

「ああ～やつぱりできねえ!!!!」

「う～んなんでだろうねえ。あれだけ魔力込めてれば何か起きるはずだけど。とにかく、クレアちゃん特製手作り弁当でも食べて、悪い所を考えてみよ～う」

そう言つてクレアは、持つてきたお弁当を広げた。

「クレアその肉とつて～・・・あつそのサンドイッチも・・・う～ん!!肉がのどに詰まつた!!飲み物くれ・・・」

「そんなんに慌てるからだよ～。で、どうおいしい?」

「ん？ オウ。 結構つまこぞ……また腕を上げたんじゃない？」

「ほんとっ？ ありがとう……あつそつだ、アスカは技を出す時魔術

で出すのそれとも呪文？」

「えつ？ 魔術で出そうって言われてるけど。 なんで？」

「魔術なら技の名前言わなきゃダメなんだと思つよ。 呪文でも詠唱  
があると思うし」

「なるほど……早速やつてみるよ」

そう言つてさつと立ち上がり、アスカは剣を構えた。

「集中・・・集中・・・集中・・・『龍波』…………」

掛け声とともに地面を這つよつに斬撃が飛んだ。

「でつでた・・・」

「うわあ～～ロベルト人形真つ一つだね～」

アスカ達が成功を喜んでいると、誰かがパチパチと拍手をしながら  
近づいてきた。

「いや～三日で留得するとは思いませんでしたよ。 とにかくおめで  
とうござこます」

それはルークだった。 どうやらルークは影からアスカの修行を見て  
いたようだ。

「急かすようですが、これを。」

ルークはアスカにバッジのような物を手渡した。

「これは？」

「これは、ホーリーナイツ仮入隊の証です。 これである程度の身分  
証明にはなるでしょう。 正式な手続きは、ホーリーナイツの本部で  
行なつてもらいます」

「よつしゃこれで俺もホーリーナイツだ！！」

ルークはまだ仮ですょつと言おつとしたがやめた。

「出発は明日の朝。 集合はここです。 身体をゆつぐり休めておいて  
ください」

「おはようルーク！――！」

「ああアスカ。おはようござります」

ルークは本を読みながらアスカに挨拶をした。

「さて、出発しましょう。目指すは、情報の町『ガルデニア』です」

「待つて、私も行く〜〜〜〜！」

「クレア！！なんでお前まで来るんだよ！！」

「アスカの行く所には、私も行くの〜〜それに私治癒能力持つてるから何かと便利でしょ？」

「どうする？」

「まあいいでしょう。彼女の治癒能力は確かに役立ちます」

「よし。じゃあ出発〜」

クレアの元気な掛け声で一同は町を出た。一同は情報の町『ガルデニア』へ旅立つのであった。

## 第六話～旅立ち～（後書き）

アスカは『龍波』を習得し、ついに旅に出た。向かう場所『ガルデニア』はサンラドと違いアスカにとって新世界だった。次話～新世界～

## 第七話～新世界～（前書き）

龍波を取得したアスカは、ルークに仮ホーリーナイツの証であるバッジをもらつた。クレアも旅に加わり、一同は情報の町『ガルデニア』を目指す。

## 第七話「新世界」

一同は、砂漠を無事に横断し、草原を切り開いてつくられたガルデニア街道を歩いていた。

「なあルーク」

「はい、なんですか？」

「ルークの槍はいつもどこから現れるんだ？」

「あああの槍はですね、私の体内に流れている魔力を放出し、それをまた魔力で押し固めた物なんですよ。魔力の色は人それぞれ違います。私の場合は金色ですよ、きっと私の心が輝いているからでしょうね」

ルークは、冗談を入れながら話しているが、アスカには「冗談に聞えなかつた。

「じゃあ俺は何色なのかな？かつこいい色だといいな」

「アスカは、きっと紅色（赤色）だと思うな。髪の毛も瞳も紅いんだもん、きっと紅色だよ」

「それだったらクレアは、銀色だろうな」

「魔力の色は、魔力で魔力を押し固めてみればわかる筈です。それか、全魔力を放出してみるか。それをやつたら死んでしまいますけど」

ルークは笑いながら「ごい事を言つた。それを聞いたアスカが早速試そうとした。

「無駄ですよ」アスカにはまだ魔力を押し固めるなんて高度な技術を扱えるとは思えません」

「ちえつ。でもまあそりや そうだよなあ～もつと慣れてから試してみるか」

「頑張れアスカ」

そんな会話を続けていると遠くに町が見えてきた。

「おや、どうやら着いたようですね。情報の町『ガルデニア』が見

えてきましたよ

町に入った一同の目に飛び込んだ風景は、サンラドとは、まったくの違う別世界だった。町には活気が溢れ、道は石でできたレンガがきれいに敷き詰められていた。辺りを見渡せば、レストランやバー、リゾートホテルのようなきれいなビルが建っていた。ビルとビルの隙間を覗けば、奥に、柔らかな日差しを浴びた、木々や草花が生い茂っている場所があり、それがまた、とても神秘的だった。

「す、すげえ！」

アスカは、その風景に感嘆の声を漏らした。

「ガルデニアは情報の町として世界に知られています。この町を活用すれば手に入らない情報はないと言われているくらいです」

「つまりね、サンラドの特産品が『砂漠の花』であるように、この特産品は『情報』なのよ」

「砂漠の花って、砂の中の鉱物が何年もかけて花のような形になつたってやつか？」一人とも・・・詳しいんだな。俺の全然知らないことばっかなのに、いろいろと知ってるんだな

「何言つてんのよ～この間授業で習つたじゃない」

そうだけ？と言わんばかりの表情を浮かべているアスカ。いつも授業を聞いていないアスカにとって、そんなことは、ほとんどどうでもよかつた。しかし、学校の決まりでホーリーナイツに入ると特別に欠席している日が出席扱いになるのだが、宿題は提出しなければならなかつた。彼の荷物の中には、手のつけられていない宿題がどつさりあつた。その為、クレアから聞いた話より、宿題をいつ終わらせるかで頭がいっぱいになつてしまつたのだった。

「そう言えば、クレア。お前学校はいいのかよ、お前はホーリーナイツじゃないんだから無断欠席になるんじゃないのか？」

アスカは学校からも許しを得ていた為、欠席していても支障はなかったのだが、クレアは別だ。彼女は無理を言ってついてきてしまつたのだから。普段そんな強気な行動をとる事は少ないのだが、アス

力が、からむと見境がつかなくなることがある。ケガをしたロベルトの治療をしてくれたのが、クレアの両親だったと言うこともあります。ルークもクレアの同行を簡単に許してしまったのだ。

「大丈夫。きっと先生ならわかってくれるよーー！」

「何の根拠があつてその答えが出て来るんだよ」

楽しそうな会話をする二人を、そつと微笑みながら見守るルークが

口を開いた。

「あつここです」

「どうした？ ルーク」

「ここが、ホーリーナイツガルデニア支部への入り口です」

「えつ？ ここが・・・」

それは、今までとは打って変わって、今にも崩れてしまいそうな廢墟のような所だった。

## 第七話～新世界～（後書き）

廃墟に入ると、外とは比べ物にならない風景が広がっていた。アスカは、そこである人物と初めて会うことになる。  
次話～対面～

## 第八話～対面～（前書き）

ボロボロな建物の前へやつてきたアスカ達。そのボロをに少し戸惑うが、足を進めるアスカ。

第八話 對面

「なあ～」二郎が、いくら支部だからってこの有り様はひどくないか

「風が吹いたら今にも崩れちまいそうだぞ」

アスカは、心の中で思ふたことを素直に口にした。  
「どうして、ミサ。」「えーと、ミサ、遅らま

「まあ大丈夫ですよ。かれこれ50年近く経ちますから、前れた」と

本當がどうがはさて置き、アーヴィングは不安を抱いたまま、ノーウッドについて行つた。

ノルマ

「ここですつて、何もないじゃないか」

アスカが疑問を抱いていると、ルークは近くにある岩に手を触れた。すると、岩肌からインターフォンのようなものが出てきた。

10

ハリーポッターブラジル語訳

地面が陥没していくとそこは地下へと繰り階段が現れた

「上野の講演はひらかた」

アスカは驚いているのか、馬鹿にしているのかよくわからない反応をした。

「さつ中へ入りましょう、と、その前に今からお会いする方はと  
つてもえら～いお方なので無礼のないよう十分に気を付けてく  
ださい・・・とくにアスカ。あなたには礼儀が足りませんので一番  
心配です。あなたの言動で私の地位や給料が下がつたら魔術やら呪  
文やらで黒焦げにしますからね」

「名前しかねー!」

アスカは口ではそう言つてゐるが心の中では、本気だ！！笑つてゐる

けど目が本気だつと思つた。

数分歩き��けているとモニタールームのようなどこかに辿り着いた。

「モニター、ラムダ元帥に繋いでください」

「リョウカイ・・・ツウシンチュウ・・・カイセンツナガリマシタ  
回線が繋がると、モニターには、一人の男を映し出した。

「どうやら一つ目の任務を完了させたようだな。ご苦労だったなルーク、早速報告を聞かせてくれ」

モニターに映つたのは、ラムダ元帥という男でホーリーナイツ特殊議会、情報部代表及び、第八戦闘部隊部隊長を務める、上層部の人間だ。見た目は、「かつこいいおじさん」といつた感じだ。髪は短めに刈りそろえてあり、口にたくわえたヒゲがダンディーで、偉そな雰囲気を漂わせている。

「無事に『神槍パラノーム』を入手しましたが、任務中ロベルトが負傷しました。幸い命に別状はありませんが、ホーリーナイツとして今後活動することは不可能だと、現地の医師に診断されました。そこで私は、ロベルトの代わりに、こちらにいるアスカ・シンクレアを任務に同行させようと思います。これは、ロベルトの意思でもあり、彼自信には自覚はないのですが超波動を起こすほどの魔力を秘めています。これは大きな戦力に成りうる可能性があります。よつてアスカ・シンクレアを仮ホーリーナイツに任命したいと考えております」

ルークがながい報告を終えるとチラッとアスカを見て、視線をモニターに戻した。

「そうか。ロベルトが負傷してしまったか。彼ほどの戦力を失うのは痛いが致し方あるまい。ルークよ、超波動はかなり強力な戦力でもあり、危険な存在でもあるのだ。十分に注意するのだ」

「了解しました。アスカ・シンクレアのことはお任せください」

「時に、そこにいるお嬢さんはどちらさんかな?」

ラムダもやはり気になっていたのか、話しながらクレアを見続けていた。

「そつそんなに見つめないでください……恥ずかしいですってか照れます……」

クレアは何故か照れ始めた。どうやらクレアはダンディーなオジサマも好みらしい。一番はアスカだが。

「彼女は……」

ルークは言葉に困ってしまい、ゆっくりとクレアの方を向いた。

「あっ、えっと、わた、私はクレア・ローズベルトと言います!! ちつ、治癒能力があるから……じゃなくてありますので、無理を言つてルーク准将に旅の同行許可を得ました」

クレアは、緊張のあまり、言いたいことがうまく言えなかつた。

「なるほど、治癒能力か……それは珍しいな。魔力で直接傷を治療することができる者は、あまりいない。呪文や魔術とはまた別の類だからな。是非とも、ホーリーナイツに入隊してもらいたいくらいだ。さて、報告はもう無さそうだな。次の任務にあたってくれ

「了解しました」

ブツンという音とともに、通信が切れた。クレアがふとルークの方を見ると、ルークがクレアの事を無言でじつと見つめていた。

「なつ何ですか？」

じつと見つめられていたせいか、クレアはちょっと赤くなつていた。

「いえ、何でもありません。ただ、正直今でも驚いています。治癒能力なんて珍しい能力は滅多に、お目にかかるませんから。それにあの場にあなたがいなければ、ロベルトは、助からなかつたかもしれません。私は、治療系の術や呪文を知りませんから」

「そんなん珍しいのか？ 治癒能力つてさ」

「かなり珍しいです。私も沢山の人と出合つてきましたが、治癒能力は初めてかもしません」

初めてではないんだ……クレアはそんなところに頭の中でツッコミを入れた。

「まあ、とにかく上からの許しが出たので、一安心ですね」

ルークはニコツと笑つた。

「それでは、ホテルへ行きましょう。次の行き先の話は、そこでします。休憩を入れてませんでしたから、今日は早めに休みましょう」こうしてアスカは仮ボーリーナイツとしての行動許可を得たのだった。そして一同はホテルへ向かった。

## 第八話～対面～（後書き）

ホテルへ向かい、休むことに。すると、誰かがクレアの部屋へやつてきた。一体誰が部屋を訪れたのだろうか。次話～『攻撃の術』～

## 第九話～攻撃の術～（前書き）

アスカとクレアはそれぞれ上層部の人間から許可をもらいついに、本格的な旅をすることに。そして一同はホテルへ向かうのだった。

## 第九話／攻撃の術

ホテルのロビーへ着いたアスカ達は、部屋の予約を入れた後ホテルの付近にある喫茶店へ来ていた。

「次の行き先のことなんですが、話してもいいですか？」

ルークは話すに話せなかつた。なぜならアスカがとても眠そうにしていたからだつた。アスカがはつとして、我に帰つた瞬間にルークは透かさず話を始めた。

「次の任務は、封印の触媒の一つ『エンシェントアッシュ』の入手です。その為に、エターナルへ向かいます」

「エターナル？」

「はい。時の町『エターナル』、とてもいいところですよ。出発は、明後日になりますからそれまでは、ゆっくりしていてください」どうやらホーリーナイツには休みが少ないらしい。アスカはこれから始まるであろう冒険にわくわくしている自分がいることに気が付いた。

その日の夜、「コンコン」誰かがクレアの部屋を訪れた。アスカだたらいいな、そんなことを思いながら声をかけてみる。

「どなたですか？」

「ルークです。少し話があるので、時間いただけますか？」

「えつ？はい。どうぞ入ってください」

アスカでなかつたことに少し残念そうな表情で、ルークを部屋に入れた。

「失礼します」

部屋に入り、ルークがイスに腰掛けるとクレアは飲み物を用意しながら尋ねた。

「どうしたんですか？」

クレアがにこつとしながら飲み物をルークに差し出し、自分もイス

に座った

「この先のことなんですが、治癒能力だけでは恐らく生き残ることは困難だと思います」

ルークがさらつと言つた。クレアは無言でルークを見つめた。

「いきなりなんですが、私があなたに呪文教えます」

「えつ！？でも、私呪文なんて使つたことありませんよ」

戸惑いながらクレアが言つた。

「大丈夫ですよ。私が責任を持つて教えますから」

ルークが優しく言つた。

「・・・・・じゃあ、お願ひします」

では、始めますか。そうルークが言つと、クレアは少し驚き、今から？と言わんばかりの表情を浮かべた。

「何を驚いているんですか？今しか時間がないですから、早く準備して外へ行きましょう」

「えつでも・・・」

「明日は、アスカとの町をデートするのでしょうか？なら早く済ませて休みましょう」

そしてルークが呪文を教え始めた。

「あなたは元々魔力の量が少ないので、魔力の消費を抑えることを基本としてやつていきましょう」

こうしてルークに呪文の基本をみつちりと叩き込まれたクレアは、クタクタになりながらも練習を重ねた。気が付くとすでに夜が明けていた。

「もう一度言つておきますが、呪文は『詠唱』に込められた『意味』を正しく理解しなければ発動しません。ですから少しずつ正しい意味を理解していくといいでしよう」

「はい！！わかりました。今教えてもらつたこの光属性の呪文『フルッシュユーノードル』はなんとなく理解できたと思います」

「それはよかったです。実戦で成功することを祈っていますよ」

さわやかな笑顔でルークが言った。それを聞いたクレアもクスッと笑う。

「では、今日のところはもういいでしょう。すっかり夜が明けてしまいましたし、これで失礼しますね。あつそれから一つ忠告しておきますが、闇属性の呪文と魔術はなるべく使用しないでください。身体へ悪影響を及ぼす危険があるそうですから。まあ今回は教えませんでしたが、いずれ知る時が来るでしょう。それと、呪文と魔術はほとんどが術者のオリジナルです。わずかな基本魔術と呪文以外はほとんどオリジナルのはずですから、敵の術や呪文の見切りはかなり困難になります。ですから十分に気を付けてください。ちなみに『フランシュードル』は私のオリジナルです」

「わかりました！！あのっ今日は本当にありがとうございました」「いえいえ、これくらい当然です。それからもっと言葉を崩してもらってくれますか？『仲間』なんですか。さて、あなたも疲れたでしょう？ゆっくり休んでくださいね。では、失礼します」

その言葉に、クレアは少しホッとする自分を感じた。そしてルークは自分の部屋に戻っていった。

「さあ～てど、寝ますかあ――――！」

クレアはようやく眠りについた。空から降り注ぐ太陽の光が、クレアをそっと包んだ。

それから五時間ほど経ち、アスカがクレアを起こしに来た。

「クレア～入るぞ～」

返事が返って来ないうちにアスカが部屋に入る。

「うわ～散らかってるな～着替えた後絶対片付けしないなコイツ」  
アスカはぶつぶつ言いながら何故か部屋を片付けた。一通り片付け終わり、クレアを起こそうとした。

## 第九話～攻撃の術～（後書き）

ルークに攻撃の術を教わったクレア。それをアスカに披露しようと  
するが。次話～『お披露目』～

## 第十話～お披露目～（前書き）

クレアはルークに呪文を叩き込まれ、クタクタになった。クレアが寝ているとアスカがクレアを起こしに部屋へやつてきた。

## 第十話～お披露目～

「おい。起きろ～今日は町を見て回るんだが～～」

「・・・まつ待つてえ～ルークううう」

クレアの寝言にアスカは少し驚いた。

「なんでルークの夢見てんだあ～コイツ・・・」

「私にはまだそんな呪文使えな・・・ああアスカ！！道に落ちた物なんか食べちゃダメだよお～～！」

「何の夢見てんだよ・・・てか俺そんなことしねえってのっ～～！」

アスカはムスッとした。そしてアスカはクレアの頬をつねりながら耳元で怒鳴った。

「起きろっての～～」

大声で起きたにもかかわらず、クレアはゆっくりと目を開けた。

「ん～もう朝？」

「・・・カワイイ・・・」

クレアの目を擦っている寝起きの顔を見てアスカはドキドキしてしまった。

「ふああ～オハヨ～アスカ～・・・」

「おつおう～～！オハヨッ～～！」

アスカはビクツとしながら答えた。

「ふあ～ねむう～。もつと寝ていたいよ・・・」

「んあ？何言つてんだよ。さつさと着替えて、メシ食つて来い」  
うんつと頷き、クレアは着替えを始めた。

「バカツお、俺の前で着替えるなつ・・・ハ、ハズカシイ・・・」  
照れながら言いつつも、クレアからは目を離さないアスカであった。

「あつゴメンゴメン。アスカは男の子だもんね

笑いながらクレアが言つた。

「んじやあ、先にロビーに行つてから支度が終わつたら来いよな

「はあ～～い」

その返事を聞き、アスカは部屋を後にした。

「あいつ……胸でかかつたな……」

アスカは顔を赤くしながら、つぶやいた。

一時間ほど経つ頃に、ロビーにクレアが来た。

「おせえ～つての！…」

「ゴメンね」

「ほらつさつさと行くぞっ！…」

二人は町へ歩き出した。

「アスカとデートなんて久しぶりだなあ～」

クレアは、にこにこしながら言った。

「はあ？ 何言つてんだ？ この間遺跡に一人で行つただろ」

「あんなのデートって言わないよ！…」

「同じだろ？」

「違うよ」

なんとも言えない会話が続く・・・

何時間が町を見て回つた後、アスカとクレアは広場に来ていた。

「あつそうそう、ルークにね～呪文教えてもらつたんだよ」

「お～すげえな。ちょっと見せてくれよ」

「もちろん。見ててよ～」

クレアは大きく息を吸い込み、詠唱を唱えた。

「光れ閃光、彼の者を貫き給え！！『フラツシユニードル』」

すると目の前に豆電球のような弱々しい光がバツと光つては消えていった。

「・・・・・んまあ～こんなもんだろう？」

「しつ失敗しただけだよ！…」

「そつそういうことにじておくよ・・・」

「よし、もう一回！…」

再び、クレアは詠唱を唱え始めた。まだやるのかよ・・・アスカは心の中でつぶやいた。

「光れ閃光、彼の者を貫き給え！！『フラッシュユニードル』」

今度はちゃんと発動したのだが、それはアスカの方へ勢いよく飛んできた。

「うわってめえクレア！！どこ狙つてんだよーーあぶねえだろ」  
そう言いながら、アスカは肩にかけていた『魔王』でクレアの放つた呪文を弾いた。

「大丈夫？・・・あの～・・・ゴメンなさい」

「まつクレアの事だから何かしでかすとは、思つてたがまさか俺に向かつて攻撃するとは思わなかつた」

「ロベルトにもらつたその剣、アスカにすっかり馴染んでるね！！」

「そう、だな・・・」

アスカは少し暗い口調で返事をした。

「そろそろ帰ろうか。明日早いし」

「ああ、そうだなっ！！今日はクレアのせいで疲れたから早く寝よう」と

「うう～～ひどい～～。わざとじゃないんだから許してよ～」

二人はデートを満喫し、宿へ仲良く帰つていった。

## 第十話～お披露目～（後書き）

一つ目の封印の触媒『エンシントアックス』の入手の為、一同は時の町『エターナル』へ向かう。次話～『時の町』～

## 第十一話～時の町～（前書き）

クレアとのトークを楽しんだアスカは、ルークに早く寝るよとさわ  
れ休むことに。そして一同はエターナルへ

## 第十一話「時の町」

「お帰りなさいお一方へ明日の出発は朝早いのでなるべく早めに休んでおいてください」

ルークはいつもどおり本を片手にしゃらりと言つた。

「じゃつ明日の朝、支度が出来次第ロビーに集合。それからエターナルへ向かおう」

「了解！！アスカ、ルークおやすみ」

「明日は自分で起きるよ、クレア」

「わかつてゐよ～」

アスカの言葉に頬を膨らませながらクレアは部屋に向かつた。

「相変わらず仲がいいですねえ～」

「ん？ そうかあ？」

「はい。とても仲がよく見えますよ」

「ふうん。まあいや。じゃあ俺も疲れたし、もう寝るよ。ルークも早く寝ろよ」

「わかつています。コーヒーを飲み終えたら寝ますか？」「じゃあ、おやすみ～」

アスカは部屋に戻り、眠りについた。

午前六時頃出発したのにエターナルに到着した時には、午後一時を過ぎていた

八時間以上歩き続けたアスカとクレアは、げつそりとしていた。ルークは仕事柄こういう事に慣れてしまつてているのか、一人平然としている。

「とりあえず、どこかで昼食をとりましょ～」

ルークの一言で、三人は近くのレストランへ入った。

「・・・落ちつかねえー。なんか落ちつかねえー」

店内を見回しながらアスカが言った。それもそのはず、店の壁一面

には様々な時計が並べられていたのだから。

「エターナルでは『各家庭及び、職場には最低50個以上の時計を置かなければならぬ』と言う、法律に近い決まりがあるんですよ」「へつ？50個もお！？そんなにあっても意味ないんじゃないかなあ」

「まあ意味があるかどうかは、ここに住む人達が決めることですから。部外者の私達がどうこう言つ問題ではないでしょ」

ルークの意見は、大人だった。

町を見渡せば、時計が必ず目に入る。しかしその時計は時計とは思えないほど可愛らしいデザインの物や、落ち着いたやさしい音のする時計まであり、ルークの言つたとおりいい町だつた。

「時計ってなんだか奥が深いなあ～」

町を散歩した後、喫茶店に場所を移した三人はこれから向かう場所について話し始めた。

「まず、これから私達が向かう場所について話しておきましょう。・・・ここです」

ルークはテーブルの上に広げた地図の一点を指差した。

「ここへ来る途中に見えたと思いますが、この場所は町の中央にある時計塔です。高さなどは未だにわかつていませんが、とてもなく高いです」

「ここに『エンシェントアックス』があるんですか？」

「はい。以前『エンシェントアックス』を回収しに来た隊は最上階で入手することが出来たそうです。しかし、その前の隊がここへ向かつた時は最上階になつたそうです。それに厄介なことにこの塔は、内部が巨大な迷路になつてゐるんですよ

「迷路」？」

「おそらく最上階まで続いているのでしょう。それに先代の任務の結果から『エンシェントアックス』のある場所は毎回変わっているみたいです」

「は、果てしねえ・・・」

アスカがボソッと言つた。

「確かに、本で読んだことがあるんだけど・・・」

クレアが視線を宙にさまよわせながら言つた。

「迷路つて片側の壁に手をつけながら進めば、八割の迷路は「ゴールに辿り着けるつて書いてあつたような気が」

「残念ですが、この迷路はその方法では「ゴールに辿り着けない残り二割の方です」

ルークが深刻な顔で首を振つた。

「あの迷路はですね、常に変化し続けているんですよ」

「変化?」

「時が経つとともに迷路の形が変化するんですよ」

「そんな・・・どうやつたら攻略できるのよ、そんな迷路・・・」

クレアは口に手をあてた。

「事実ですから仕方がありませんよ。おそらく魔法でしょう」「なあちょっと疑問があるんだけどさ」

アスカがルークに尋ねた。

「先代のホーリーナイツの隊員は入手できたんだろう?なんでその人達からのヒントとか攻略法がないんだよ?」

「それはですね、イビルナイツのスペイや裏切り者がその情報を盗聴など出来ないようにする為に、以前お会いしたラムダ元帥や先代の情報部代表、つまり、情報部総司令官に、その任務を行つた小隊の隊長が直接報告するからですよ」

「じゃあ、どうすりやいいんだよ」

「そこですね私なりに考えて、もう手は打つてあります」  
困った様子のアスカにルークがにこつと笑つて見せた。

## 第十一話『時の町』（後書き）

時計塔に向かうことになったアス力達。ルークの策である人物と行動を共にすることになる。次話『『時計塔』』

## 第十一話 時計塔へ（前書き）

エターナルについて一同は『エンシントアックス』の場所について話し合い、時計塔へ。ルークの策とは。

## 第十一話「時計塔」

「エリが……時計塔……」

アスカは上を見上げた、けれど雲で頂上が見えない。

「すっげえ迫力。これ一階、一階が迷路になってるんだろう?」

「そのとおりです。これだけの高さがある塔です。一つずつ迷路をクリアしていくには時間がたりません。おそらく私の考えが正しければ……」

ルークは言葉をきつた。自分の考えに絶対と言ひ直信がなかつたからだ。

その考えとは、「自分達は迷路をクリアする必要はない」と言つものだった。いくらなんでも一階、一階迷路をクリアしていくには、きりがない。つまり、『エンシェントアックス』を入手する方法は他にあるのではないか? そう考えたのだ。そこで考えついたのは、迷路にかけられた『魔法』をどうするかだ。魔法と言うのは、魔術や呪文とは違い、永続的にその効果をもたらすと言われている。しかし、長時間術者から離れてしまつとその効果は消えてしまつ。つまり、術者を倒せば『変化し続け、壊しても再生する』と言つ魔法を解くことが出来るのだ。そうすると壁は変化しなくなり、壁を壊しても魔法の効果が消えている為、壁は再生しないのだ。これなら壁を壊しながら進み、簡単に迷路を攻略することが出来るルークは考えた。

今も尚、魔法の効果は、続いている、魔法が消える気配はない。それは術者がこの塔の中に入っているということを意味する。

「要するに、俺達は迷路を攻略することを考えるんじやなくて、術者を捕まえて魔法を解くことを考えるってことなんだな?」

「はい。私は『迷路の突破』ではなく、『術者の捕獲』こそが『エンシントアックス』の入手条件だと考えています」

しかし、一つ問題がある。それは、どうやって術者を見つけ出し捕

らえるか、だ。その事をアスカも疑問に思い、ルークに尋ねた。

「でもさ、迷路の中から人一人探し出すのも、それはそれで大変だぜ？」

「わかつています。その為に彼を呼びました」

ルークが指差した方向には、一人の男がいた。

年齢は、三十代半ばといったところか。タバコをくわえながら頭をかいている、やる気のなさそうなところがアスカと似ていて、アスカ自身親近感を覚えた。

「彼は、ライザ・ディスカスさんです。ホーリーナイツ・エターナル支部で働いている特殊戦闘部隊の方です。彼には、クレアのように少し特殊な能力があるので今回急遽任務に同行をお願いしました」「どんな能力なんですか？」

クレアの問いに、ライザという男は気だるそうに答える。

「感知能力さ。一定の範囲内に『生物』が存在するかどうかを感知することができる能力さ。護衛なんかに便利な能力だな・・・」

「この能力は今回非常に役立つでしょう」

ルークがこりと笑った。

「今回の任務は、彼を加えた四人編成の小隊で行います。準備はいいですか？」

「おう。いつでもいいぜ！――」

「おつと、大事な事を一つ言い忘れていました。この塔内部では、流れれる時間の速さが通常の三倍のスピードです。ですから、行動は、迅速且つ、正確にお願いします」

「そんな大事な事はもつと早く言えよ――！」

「すみません。最近物忘れが激しくて。さて、行きましょうか」

「コッ」としながらルークが最初の一歩を踏み出した。

「ギイイイイイイイ」長い間放置されていた為か、嫌な音をたてながら目の前の大扉がゆっくりと開いた。

「うわつマジで広い迷路だな・・・こりや骨が折れそうだ」

アスカがため息を吐きながら言った。

## 第十一話～時計塔～（後書き）

ルークの策で術者を捕らえることに。果たしてルークの策はうまくいくのだろうか？次話～『術者』～

## 第十三話～術者～（前書き）

ルークの策で時計塔の中へ入ったアスカ達。その時計塔は、想像以上に広かつた。

## 第十二話「術者」

中へ全員が入るとルークが口を開いた。

「ライザさん、急かす様で悪いのですが、早速お願ひします」

「・・・わかった。少し待つてくれ」

そう言つてライザは、床に手を置いた。すると、床に魔法陣のようなものが浮かび上がり、ぶわっと風が吹き上がった。

「うつうわあっ！！」

「大丈夫かクレア？」

「・・・うん、大丈夫。ありがとうアスカ」

「・・・それにしても、こんな広い迷路で術者なんて本当に見つかるのかな？」

「きつとライザさんなら見つけてくれますよ」

ルークが余裕の表情を見せるように言った。

「・・・・・・・・残念だが・・・・・」

ライザが重い口調で言った。

「どうしたんですかあ？」

クレアが尋ねた。

「この塔には・・・人の・・・いや、俺達以外の生物の反応がまったくない」

「バツバカなっそんなばずはっ！－！」

珍しくルークが動搖している。

「つまり、ルークの予想は外れて『エンシェントアックス』の入手が困難になつた。しかも帰り道がすでに、変化してなくなつていてる為、生きてここから出ることすら、難しい・・・ってどうすんだよ！」

「ただ、なにか・・・なにかを感じる。今はそれしか・・・」

ライザの言葉にアスカが反応した。

「ルーク、俺考えたんだけどちょっと聞いてもらひえる?」

アスカが何か思いついた様だ。

「何ですか?」

ルークはパツとしない顔でアスカを見た。

「ライザさんの言つ「なにか」は俺も感じるんだ。しかも、前にも感じたことのある。その感覚は、『神槍パラノーム』と同じ感覚だ。だからその「なにか」ってのは、もしかすると……」

アスカの言葉にルークが表情を変えた。

「『エンシントアツクス』……」

ルークとクレアがつぶやいた。

「それなら、そのなにかに向かつて進むのが一番だろ?」「そうですね。では、その「なにか」に向かつて進みましょ?」

ルークがようやくいつもの冷静さを取り戻した。

一同は、感じる力を辿り、さまよつては、階段を上がり、を繰り返し数時間が過ぎた。

「ねえ、アスカ、まだ着かないの? もうかなり時間が経ってるよ」

そうクレアが言った。すると、アスカが急に立ち止まった。

「おい、あれなんだ?」

ルークがそれに近寄つていった。

「これは・・・古代文字ですね」

そこには、古代文字が刻まれた石碑があつた。

「クレア、あなた確か学校で古代文字の読み方など学んでいますよね? すみませんがこれを声に出して読んでみてください」

「了解。ええ、と・・・これは・・・」

クレアが解読に入ると辺りに緊張感が張り詰める。

「よし、解読できた。じゃあ読み始めるね」

全員が頷き、クレアが古代文字を読み始めた。

『常識に・・・囚われるべからず、ただひたすら・・・前へ進むべ

し』

クレアが文字を読み終えると、石碑がすくっと消えていった。

「・・・あわっかんねえー！…さつぱりわからねえー！…」

誰もがアスカが言つだらうと予想した言葉を、アスカは言つた。

「まあ深く考へない方がいいですよ、アスカの場合」

「どういう意味だよ」

「そのまんまでですよ」

ルークは笑いながら言った。

「さつ先へ行きましょう」

ルークは、笑いながらスタスターと進んでいった。

「まつ待ちやがれ！！」

アスカはムスッとしながらもルークについて行く。それにクレアとライザもついて行く。

数分歩き続けると、道が行き止まりになつていた。

## 第十三話～術者～（後書き）

行き止まりにたどり着いたアスカ達。引き返すにも引き返せないこの状況を、どう乗り越えるのか。次話～術者～（後編）～

## 第十四話～術者（後編）～（前書き）

ルークの予想が外れ、困ってしまった一同。しかしライザとアスカが感じた『なにか』に惹かれる様に進んで行くと、その先には石碑と行き止まりがあつた。

## 第十四話～術者（後編）～

「お～い、行き止まりに着こちまつたぞ～」

アスカが面倒くさそうに言つた。

「おかしいですねえ。石碑に記されたとおりに、まっすぐ進んだはずなんですが・・・」

さすがにルークも困つてしまつたようだ。

「この壁・・・何か違和感を感じるんだが・・・」

ライザの言葉に続くよにクレアが言つた。

「なんか、如何にも「行き止まり」ですよお～つて感じだよねえ」

「はあ？お前何言つてんだ？こりや行き止まりなんだからそう感じるのは当たり前だろ？」

「そつそつなんだけどお～」

自分が言つている事は、常識的に考えれば正しい。それを示そうとアスカは、壁に近寄つた。

「いいか？これは見てのとおり壁だ。その証拠に・・・」いやって壁を叩けば、手が痛くなる・・・

アスカが、喋りながら壁を叩こうとするが、手が壁をすり抜けその勢いでアスカは倒れた。

「いつてえええ～・・・つたぐ、どうなつてんだよ～」

「石碑の古代文字の「常識に囚われるな」とは、この事だったのか」「ナイアスアスカ！－グッジョブツ！－！」

クレアが笑いながら言つた。

「いや～アスカは、本当に何をしでかすかわかりませんねえ」

相変わらず、ルークは嫌味な言い方だった。

「まつお手柄という奴だ」

ライザは、ほめてくれた様だが何故かムカツときた。

全員が一通り言いたい事を言つと、アスカが発見した行き止まりを通つて行く。

「ちょっと待てよ……」

アスカがそれを追いかけて行くと、そこには、真っ白な空間が広がっていた。

「なんか……この部屋どこまで広がってるのかわからないね」「クレアが思ったことを素直に言った。

クレアの言ったとおり、ここには壁や天井、床すらも真っ白でどこまでも続く、まるで自分たちが宙に浮いているような感覚になるような場所だった。

「すげえ綺麗だな、ここは」

「……うん」

アスカとクレアは、この部屋の雰囲気にすっかり包まれてしまい、二人の世界に入りかけていた。

「はいはい、いいムードのところすみませんが、任務の続きをしますよ～」

いいムードを、一瞬のうちにルークはぶち壊した。

二人は照れながらパツと離れた。そして、アスカは真っ白な空間に見える一つの斧に近づいて行く。

「これが……『ヒンシントアックス』……」

アスカはそう言って目の前にある大きな斧を持ち上げた。

「ブワッ……」風が巻き起こり、髪がなびく。そしてすぐに静寂が戻つてくる。

アスカが目の前を見ると大きな扉が現れた。どこかで見たことのある扉。そう、それはこの塔の入り口だった。

「そう言う事でしたか……」

ルークが何かに気が付いた。

「どうかしたの？」

「私は、この塔に魔法を使用し続けている術者がいると言いましたが、それは間違いでした」

「どういう事だよ？」

「つまり、この『ヒンシントアックス』その物自体が『術者』だ

つたんですよ」「

「・・・この武器が自ら結界魔法を発動し、安全を確保していた。つと言つ訳か・・・」

「要するに、今までの迷路と石碑の文字は、俺達への試練だつたつてことなのか?」

「まあそんなところでしょう」

「とりあえず、任務達成って事だな?なら、さっそく帰つて報告済ませようぜ」

「ああ～～沢山汗かいたからシャワー浴びた～～」

「そうですね～クレアも何か言い始めましたし」

「何よそれ～ルークの意地悪つ！！！」

「いえいえ、なんでもありませんよ～さっ帰りましょ～」

「ふつ・・・」

ライザが鼻で笑っていたのを、クレアは見逃さなかつた。  
こつじて無事に任務を達成した一同は、ホーリーナイツ・エターナル支部へ向かうのであつた。

## 第十四話～術者（後編）～（後書き）

無事に任務をこなしたアスカたちは、エターナルへ戻り、任務の報告をする。しかし、そこで物語は急展開をみせる。次話～『展開』

）

## 第十五話～展開～（前書き）

術者の正体は、目的の物『エンシェントアックス』だった。触媒入手の為の試練をなんとかクリアした一同は、その報告の為に工ターナルへ。

## 第十五話／展開

「以上で報告は、終わりです」

「そうか～ご苦労様」

「次はどこへ向かえばいいのですか？」

「え～っとね～そのことなんだけど・・・」

アスカたちは、報告の為にホーリーナイツ・エターナル支部通信室に来ていた。ルークはラムダに報告をしようとしたのだが、ラムダが不在の為、アキラ大将に急遽連絡したのであった。

ちなみにアキラは、情報部副総司令官であり、ルークより幼くして出世しているすごい人物なのだ。

「どうかしたんですか？」

「もう触媒集めは、しなくてよくなっちゃったんだよね～」

「！」

「実はね・・・先日他の者にも触媒を取りに行かせたんだけど、触媒が破壊されていたんだ」

「そつそれでは、魔物の封印も解放もできなくなるのでは？」

「そのとおり。触媒は六つで一つの効果を發揮する。つまり、一つでも欠けてしまえば、十年間程、その能力は失われる。十年経てば、壊れた触媒は復活して今までどおりの効果を發揮することができるんだよ」

「なあ～。触媒が破壊されてたのってイビルナイツの仕業なのか？」

難しい説明を理解しようとアスカは思った事を質問していく。

「いえ、それはおそらく違います。イビルナイツは、触媒から溢れ出す魔力を使って、封印の書に封印されている魔物を解放するんです。しかし、触媒は一つでも欠ければ、その力を失いますから、イビルナイツも魔物を解放できなくなるんです」

「ならホーリーナイツは、どうやって封印するんだ？」

「僕たちは、六つの触媒を全て集めたら上層部の人間がいろんな事

をやつて、この世にいる魔物を一気に封印の書に封印するんだよ

「つまり、今まで俺達がやつてきた事は無駄になるわけ？」

「まあ集めていた物が、不必要になりましたから」

「おいおい、そりやねえよ」

アスカの顔が一気に暗くなつた。

「まあまあ。でも、イビルナイツが魔物を解放できないって事は、これ以上魔物は増えないって事だよ」

「そのとおりだよ」だから、ルーク君達には、この任務をやってもらうことにするよ」

そう言うと別のモニターに詳しい任務の内容が映し出された。

「じゃあ僕は、この後会議があるからこの辺で失礼するよ～

「はい、わかりました」

「なるほどねえ・・・」

「この任務の内容は、『すでに解放されてしまった魔物を倒し、殲滅すること』なんだね」

「はい、そのようです。しかも、魔物を倒しながら、触媒を破壊し

た犯人も探し出さなくてはなりません」

「手掛かりは、この『白いコート』を着た人ってことくらいか・・・

これは情報が少なすぎないか？」

「それなら『ガルデニア』で情報を集めるのはどうかな？」

「・・・それが一番よさそうですね。では、明日の朝この町の入り口に集合して、それから出発しましょう」

「俺の役目はここまでだな」

ライザはそう言つと部屋のドアの方へ歩いて行く。

「ありがとうございました！」

アスカがお礼を言つと、ライザが口を開いた。

「アスカ、この町の中央にある『エターナル・ソード』を、一旦見ておくといい

「え？」

ライザはそう言い残すと、スタスターと歩いて何処かへ去つて行つてしまつた。

「行つてみよウよアスカ～」

「そ、うだな、行つてみるか！」

「・・・では、行きましょウか」

ルークが少し疲れた顔で言つた。

## 第十五話～展開～（後書き）

ライザに言われ、『エターナル・ソード』を見に行くことに。そこで一同は『白いコート』を着た人物に遭遇する。次話～『ハロルド』

## 第十六話～ハロルド～（前書き）

触媒を集める必要はないと、宣告されたアスカ達。次なる任務は、魔物討伐及び白いコートの正体を暴くことだった。

## 第十六話／ハロルド

「なあルーク」

「はい？ 何ですか？」

「どうしてイビルナイツとホーリーナイツができたんだ？」

「ああ～そうですね、アスカには話しておいた方がいいかもしだせんね」

「？」

「これは、ホーリーナイツに入らないと知ることが出来ないことがなので、今後一般市民に、今から言つことは口にしないでください」

「わかった」

「実はですね、元タイビルナイツとホーリーナイツは同じ存在だったんですよ」

「！」

「ははっ。私も知らされた時は、驚きましたよ。私達の宿敵が元は、同じ存在だったんですから。それはさて置き、400年程前に最強の魔力を持つ『魔王アシュード』がその魔力で世界を支配しつつある時、魔王を倒すべく、魔王討伐隊が構成されました。討伐隊は、自らの命をかけて魔王に挑みましたが、結局敵いませんでした。兵力を失つた討伐隊は、ある作戦を考案しました」

「ある作戦・・・？」

「はい。それは、魔物を戦わせるというものでした。人と魔物は、何千年も対立していた存在でしたが、兵力を失つた討伐隊は今まで封印してきた魔物を解放し戦わせようとしたのです。しかし、討伐隊の中でその作戦の反対派と賛成派に分かれてしまいました。無論、その作戦は決行されず、魔王を封印する流れになり、なんとか魔王を封印することが出来たそうです」

「それが今のホーリーナイツとイビルナイツになつたってことか？」

「はい、まあそんなところです。他にもいろいろとあつたみたいで

すが、私は知りませんので

アスカとルークが会話しているところにクレアの声が入ってきた。

「ねえ～あそこに見えるのって『エターナル・ソード』じゃない？」

「はい、そのとおりですよ～クレア」

アスカ達は、それに近づいて行く。

「これが・・・『Hターナル・ソード』？すっげえ～剣かと思つてたのに、こんなにボロボロだつたとは・・・」

アスカが少しがつかりしていると、クレアが口を開いた。

「何百年もここに刺さつたままだつたから、しようがないよ

「そんなに経つのか？ここに刺さつてから

「はい。魔王を封印した時以来この剣は、ここに刺さつたままで。

この剣には、恐ろしいくらいの魔力を秘めています。そのせいか、

この町にはこの剣から溢れ出でている魔力が、漂つているんです」

「へえ～。なんかよくわからなかつたけどすげえ

「はあ～～人がせつかく説明してあげていると書うのに、あなたと言う人は・・・」

ルークが深く溜め息をつくと、アスカが何かを発見した。

「なあ～この窪みは何なんだ？」

「ああ～これはですね～私にもよくわかりません。ただ、この剣を封印した時に使用した何かをはめる所ではないでしょうか？」

「ふ～～ん

アスカが納得していると、目の前を白衣コートを着た男が通り過ぎた。

「おいつ～～あれつて・・・」

「白衣コート～～追いかけましょ～～」

「待つてよあ～～

白衣コートの男を追いかけていく・・・

「おいつ～～待てよ、そこの白衣コートを着た奴！！！」

アスカが大声で呼び止めると、その男はゆっくりと振り返った。

「・・・誰？・・・紅い瞳に・・・蒼い瞳・・・銀髪の女の子・・・  
ああ！！アスカ・シンクレアと愉快な仲間たち見つけ！！」

「その男の発した言葉に、一同はキヨトンとしている。

「俺つハロルドって言つんだ！！君、アスカだろ？いやあ～ずっと  
探していたんだよお」

被つていたフードを取りながらハロルドと言つ男は、自己紹介をしてきた。

「アスカ～知り合いなの？」

「知るかってのっ！！初対面だ！！初対面！！」

「何か用ですか？」

ルークが冷静に問い合わせす。

「実はさ、俺も『白いコート』の連中を追つてるんだよ～～～」

「～～」

アスカ達は、その言葉に表情を変えた。

## 第十六話～ハロルド～（後書き）

突如現れたハロルドと言う男は、仲間になりたいと言つてきた。  
ス力達の答えは・・・？次話～『新たな仲間』～

ア

## 第十七話～新たな仲間～（前書き）

白いコートを着た男見かけたアスカ達は、急いでその男を追いかけ  
る。しかし、その男は、白いコートの奴らではなく、アスカ達同様  
白いコートの奴ら追っている者だった。そしてその男は、アスカ達  
の仲間になりたいと言いくだす。

## 第十七話／新たな仲間

「今何つて言った?」

アスカが聞き直すと、怪訝そうな顔でハロルドが答えた。

「だからあ～白いコートの奴らを追ってるんだよ～」

「・・・じゃあ何で俺達を探していたんだ?」

「え～とそれは、君達も白いコートの奴らを探してるってホーリーナイツの人聞いたからだよ」

「はあ～？どういうことだよ?」

「だからね、ホーリーナイツの情報部の人々に、白いコートの奴らの情報をもらおうと思って訪ねてみたら、君達がちょうど白いコートの奴らについて調べることになつたって聞いたから一緒に連れて行ってもらおうと思つたんだ。ほらっ任務同行許可書だつてちゃんとあるんだよ!! なあ～いいだろ～連れてつてくれよ～」

アスカは困つてしまい、暫く黙り込んだ。

「ねえ～連れて行つてあげてもいいんじゃない?仲間は、多い方がいいし・・・」

クレアがそう言つとルークが暫く考え口を開いた。

「・・・まあいいでしょ～。よろしくお願ひしますね、ハロルド」「よろしくお願ひします!～！」

ルークとクレアが挨拶をすると、ハロルドも挨拶をした。

「・・・アスカも挨拶しなよ!～！」

「ん? あつああ、よろしくなつハロルド!～！」

「こちらこそよろしくです!～！アスカ君」

「君付け・・・まあいつか」

「えつと～これからは、みんなことを『アスカ君』『クレアちゃん』『ルークさん』つて呼ぶね!～！」

「私はまだ君付けでも大丈夫ですかね? クレア」

「えつ? 私にそんなこと聞かないでよ!～！」

ルークの問いに答えることが出来なかつたクレアは、ルークも歳や外見を気にしているんだつと心の中で思つた。普段の生活や態度を見ていれば、あまり気にしていない様に見えるのが当然だ。一応、実年齢は21歳なのだが、その思想は、35歳くらいなのでそう言われてても仕方のことなのが。

「でもさ～なんで白いコートなんか着てたんだ？」

「これ着ていた方が発見してもらえる確率があがるでしょ？アスカ君達も白いコートの奴らを追つてるんだから」

「ああ～～なるほど・・・じゃあ何で白いコートの奴らを追つてるんだ？」

アスカが問うと、ハロルドの表情が急に変わつた、殺意に満ちた顔へと。

「白いコートの奴らに、俺の両親は殺された・・・だから復讐したいんだ、ただそれだけ・・・」

辺りが一瞬で静まり返つた。

「・・・ゴメン、なんか悪いこと聞いちやつたな」

「いや、いいんだよ。いつか話さなきやいけないことだつたから」「さて、そろそろ宿へ行きましょうか。私達は明日、ガルデニアに向かいます。しっかりと休んでおいてください」

一同は、宿へと足を運んだ。一晩休み、一同は、情報の町『ガルデニア』へ向かうのであつた。

「情報を頂けますか？」

ルークの冷静な声が店内に響く。

今4人がいるのは、ガルデニアでも一番情報が集うと言われている大きな情報屋である。

「何の情報が欲しいんだい？」

「『白いコート』について」

店員がびくりと反応した。

「最近少し噂になつてきてるあいつらの事が・・・ふふ、その情

報は高くつくぜ？

「構いません。お金なら沢山ありますから

その情報は、本当に高かった。

## 第十七話／新たな仲間（後書き）

ハロルドを新たな仲間に加え、一同はガルテニアへ。『白いコート』は、既に情報屋の間では、噂になつてゐるようだつた。情報屋でもらつた情報には、アスカ達には放つておけない情報が載つていた。

次話／『その情報』

## 第十八話～その情報～（前書き）

ハロルドを新たな仲間に加えたアスカ達。白いコートの情報をも求め、ガルテニアへ。そして得た情報には思わぬ記事が。

## 第十八話「その情報」

先日、ネフェスの地下に封印されていた触媒の一つ、『暗黒剣・ダークソード』が何者かに破壊されているのを発見した。現場付近では、白いコートを着た人物を目撃したと言う情報が多数報告されて・・・

「目新しい情報はないね」

ハロルドがざつと情報に目を通し、少し残念そうに言った。

「ところでさつネフェスってどんなところなお？」

「夜の街『ネフェス』。月に2回しか昼間が来ない不思議な街です」

クレアの問いにルークがさらりと答えた。

「じゃあ普段からずっと夜ってことか・・・なんか性格暗くなりそう。まあとにかく、白いコートの目撃情報があつたんだからそこに行つてみようぜ」

「そうですねえ、それ以外に行くところもありませんし・・・ネフェスに行く方がいいでしょう」

「待つて!!」

今まで話を聞いていただけだつたハロルドが口を開いた。

「まだこの情報続きがあるから・・・」

本日午前5時、ロウグにてホーリーナイツエターナル支部の隊員のライザ・ディスカス氏の遺体が発見され、現場付近では白いコートを着た人物が目撃されている

「ライザ・ディスカス!!」

アスカ達は、驚きの声を上げた。

「どういうことだつ何でライザさんが・・・」

「知り合いなの?俺は直接会った事ないけれど、きっと白いコート

の奴らに殺されたに違いないね・・・

「でも何でライザさん、エターナルにいる筈なのにロウグで殺されちゃつたんだろう・・・」

「わかりません。とにかく、ロウグへ向かいましょう！――ネフェスは後回しです！――」

アスカは拳を、ぎゅっと握り締めた。昨日、短い時間ではあったが共に任務をこなした仲間。そんなライザに自分の面影を少し感じていたアスカは、ライザを殺されたことが許せなかつた。

「許せねえ・・・」

アスカの瞳には、怒りがこもつていた。

「しかし、気になりますね・・・なぜライザさんは、殺されなくては、ならかつたのでしょうか・・・」

「どうしたんだよルーク！――早くロウグへ行こう――」

「はい、すみません」

目指すは、霧の町『ロウグ』。由ゴートの手掛かりは、きっとそこにある。

一同は、手掛かりを求め、ロウグへ。

## 第十八話～その情報～（後書き）

ライザの死を知ったアスカ達は、事件の真相を探る為に、『霧の町』『ロウグ』へ。ライザは一体何を知ったのだろうか。次話『手掛かり』

## 第十九話～手掛けり～（前書き）

この小説が連載してから一ヶ月ほど経ちました！…いつも同じ愛読ありがとうございます。まだまだ話は続くので、応援よろしくお願いします。

## 第十九話／手掛けり

「『』が・・・ライザさんが殺された町。白いコートの手掛けりはきつとここにある筈なんだ・・・」

アスカが拳を強く握り締めながら言つた。

「まずは、周囲の人間に聞き込みをしましょう。何事も情報収集は大事です」

「わかった。じゃあ、一時間ほど情報収集して、またここに集合だ。それでいいか?」

「異議なくし」

「それでいいでしょう」

「よしつ、解散〜!!」

クレアの合図とともに一同は、情報収集を始めた。

やがて集合の時間になり、一同は、集まつた情報の報告をしていた。「では、私から。『事件の当日大きな音がした』これくらいしか私は集めることが出来ませんでした」

ルークが申し訳なさそうに言った。

「んじやあ俺ね。『呪文ではなく、魔術を使用した痕跡があつた』そうだ。でもなんでそんな事がわかるんだ?」

アスカは首を傾げながら言つた。

「魔術は、呪文に比べて魔力の密度が濃いですから、魔力が付近に残るんですよ」

サラツとルークが答えた。

「次は俺ね。俺が聞いた情報は『白いコートを着た人物が一人、この町をうろついていた』だよ。じゃあ次クレアちゃん

ハロルドが少し急かすようにクレアに言つた。

「えっと、私の聞いた話は『白いコートってお店のパンは、おいしつてのと、白いコート屋つてお店がある』くらいしかわからなか

つたよ」

クレアは、「頑張った方でしょ」と言わんばかりの表情を浮かべた。

「何がが違うよ・・・クレア」

一同は、そんな事を思った。しかし、ルークだけは、クレアの話に少し耳を向けていた。

「クレアの教えてもらつたその一つのお店に行つてみましょう。何かわかるかもしれません」

ルークは真剣な表情で言った。

「でもさ、パン屋なんか行つてどうするんだよ」

その表情が真剣だった為、アスカ達はパン屋に行くことに反対をしなかつた。

「・・・さあ、深い考えはありませんよ。ただ、何か関連性がありそうな気がしただけです。他に行く当てもありませんし

「まあそれもそうだよね~」

ハロルドもルークの意見に賛成だつた。

「じゃあ、パン屋さんに行こ~う!!

クレア、テンション高つーー!そんな事を思いながら一同は、パン屋に向かつた。

第十九話「手掛けり」（後書き）

次話「『その店』」

## 第一十話～その店～（前書き）

情報収集でクレアが聞いたパン屋に向かつたアスカ達・・・

## 第一十話「その店」

一同はパン屋「白いホール」の前に立ち、絶句していた。

「・・・黒いな」

アスカがやつと「こと」とで言つた。

「・・・黒いですね」

「・・・どうみても黒だね」

「・・・真っ黒だね」

そのパン屋は、店の名前に反して見事なまでに真っ黒だった。

何だかとてもなく怪しいオーラを出している。

店といつよりは幽霊屋敷といったほうがしっくりきそうだ。

「とりあえず店に入つてみましょ」

ルークの言葉に、一同は店へと入つていった。

「いらっしゃいませ・・・」

店に入った瞬間、か細いぼそぼそとした声が聞こえてきた。カウンターのところに座つている男が発した言葉だ。恐らく彼が店主なのだろう。

肌はかなり不健康そうで青白く、しづくちやだ。年齢は50代後半から60代前半といったところか。

「あの、少しお話を聞きしたいのですが」

ルークが言つと、その男はギョロリと目を動かした。

「何でしょう?」

「最近この町で、ホーリーナイツの男が殺害される事件がおきました。現場では白いコートの人物が目撃されているのですが、何か心当たりはありませんか?」

男は話を聞いて驚いたように眼を見開いた。

「え・・・貴様ら・・・」

「え、なに？」

クレアが聞き返す。

「貴様ら・・・出行け！ 今すぐ、今すぐだ！ 出行け、この

蛆虫どもが！」

店主のいきなりの変貌ぶりに4人は何が何だか分からず、立ち尽くした。

「出でけ！ 汚らわしいガキどもめ！ そんな奴、ワシは知らん！ 出でけ！」

店主は相当混乱しているらしい。

これ以上まともな会話はできないと思った4人は、店の外へと避難した。

「あのオジサン、絶対変だね」

店の外で、ハロルドが店を見ながら言った。

「何か知ってるに違いない」

「そうかもしません。ただ・・・」

ルークはため息をつきながらパン屋を見た。

「しばらくまともな会話はできないでしょう。あの状態では」「じゃあ、どうするの？」

「・・・とりあえずもうひとつ、「白いコート屋」にも行ってみましょう。それからもう一度ここによつてもう一度話を聞く。といつてもある人が素直に話してくれるとは思えませんがね」

4人は同時にため息をついた。

「とりあえずもうひとつのはつにも行ってみよつぜ。何か分かるかもしれないし」

アスカがいい、4人はもうひとつ、「白いコート屋」へと歩いていった

第一十話～その店～（後書き）

次話～『もう一つの店』～

## 第一十一話～もひーとの店～（前書き）

真っ黒な店を後にしたアスカ達は、白いourke屋に向かっていった。

第一十一話 もう一つの店

「それにしても黒かつたな……パン屋

「はい。真っ黒でしたね・・・パン屋」

全然おしゃべりなハン屋さんじゃなかつたよお。。。

仕事の仕方を教へて貰う事で、少しづつ身が大きくなる

受けていた。

あいだよ

「……今度はお嬢様の御用意を……」

よ。さつ中に入らうぜ」

アスカはホッとした顔で店に入ろうと言った。

老の手可木中ノ人ニ志しニシテ

「いや、これは、普通で安心したよ。…………『黒いパート』

二〇一九年九月八日

「うわあやばい、俺なんか泣きそうだよー」

クレアは泣きそうなハロルドを、微笑みながら励ました。

一一一 情懷

卷之三

「珍しいわ～」ここにお客さんが来るなんて

八九二、中孚、孚惠心勿、惠心勿、惠心勿

よろしいですか？」

ルークがその女性に聞きたい事を尋ねた。

「そういう事件があつたのは知ってるけど・・・あたしこは心当た  
りないわね~」

サロマと名乗つたその従業員の女性は少し困つたように言った。

「そうですか」

サロマの答えを聞き、ルークが残念そうに言った。

ここでも収穫なし。

4人は諦めて店を出ようとした。が、そのとき、サロマが不意に「あ!」と声を上げた。

「何か思い出したんですか？ サロマさん」

クレアが期待に満ちた目でサロマの方を振り返つた。

「ちょっと噂で聞いたんだけどね、こと同じ『白ごコード』って名前のパン屋さんの主人が事件について何か知つてゐみたいなのよ

「ほ、本當ですか？」

「いや、ただの噂だからあてにされても困るけどね」「でもさつきその店行つてみたけど、事件のこと話したらいきなり怒り出して話なんて聞けなかつたぜ?」

アスカの言葉に、サロマはうーんと唸つた。

「あの人、最近何かに怯えてるみたいなのよね」

「怯えてる?」

「ええ。前までは普通の人だつたんだけど、最近はやたら拳動不審になつちゃつて。店に閉じ籠つて外に出ようとしないの」

4人は顔を見合せた。

「どうする？ もう一度あのパン屋に行つてみる？」

「でもサロマさんの言葉が本当なら、簡単に私たちを信じてはくれないんじゃない？」

ハロルドにクレアが言葉を返す。

4人が同時に唸つた。

と、そのとき、町中にビーンという巨大な音が響き渡った。

「な、なんだ！？」

「爆発音です！」

「どこからだ！？」

アスカは辺りを見回したが、町中に薄く掛かっている霧のカーテンにより、場所が特定できない。

「あの方向・・・さつきのパン屋さんじゃ！？」

クレアの言葉にアスカは、はつとした。

「行こう！」

ハロルドの言葉をきっかけに、4人は一斉にパン屋へと駆け出していく。

「・・・・・」

駆け出していつた4人の背中を、サロマは無言で店の窓から見つめていた。

第一十一話「もう一つの店」（後書き）

次話「焼け跡」

## 第一十一話／焼け跡／（前書き）

サロマの店を出ると大きな爆発音が。音のする方へアスカ達は、駆けて行く。

# 第一十一話 焼け跡

パン屋の前に到着した一同が見たその光景は悲惨なものだった。

「うれ、真っ黒を極めなやつだね」

ハマル五が至難の道だといつた。

ルークの冷静な判断には、皆納得した。

「一体何故ここが爆発したんだ?」

わからなしだれ、そこへ言えは——」お店の人何かに怯えてた

「じゃあ、何かを知つちやつてつて」とかなか

「おそらくですが、この店の店長は『白衣マーク』の組織となんらかの関係があり、何か重要な情報を耳にしてしまった。そして口止め料を取つて、その関係を絶つ場面が見えたのです。」

۱۰۷

「ひどい。何も殺すことないのに・・・」

「いえ、ひどいとは限りません。組織の情報や秘密を守るのには、もっと効率のいいやり方です。殺すと言う事は、余程重大な何かが起ころうとしているか世間に知られれば計画が失敗に終わる等に違

「許せねえ

「必ず正体を暴いてやるんだからーー！」

希伯來書

アスカ達は毒に出して皆つた。

「ルーク准将！ルーカ准将！伝令であります」

アーリーの隠真力馬は、アーリーが

「ホーリーナイツ本部に直ちに帰還せよとのことです」

「……」

一同はその言葉に驚いた

「なんでだよ！…まだ俺たち任務こなしてないんだぞ…！」

「しかし、伝令ですので私に言われても困ります」

「アスカ、一旦本部に戻りましょう。もしかしたら『白いポート』について何かわかつたのかかもしれません。それにあなたには、正式な入隊手続きをしてもらいます。いつまでも仮入隊ではいられませんから」

「ではルーク准将、僕はこれで失礼します」

「ご苦労様です」

ルークはにこりと笑い隊員に礼を言った。

「本部つてどこにあるんですかあ？」

クレアが尋ねた。

「本部は、光の都市『サンライトタウン』にあり、ここから北東に進んだ所にあります。ですがここからはかなり距離があります。サンライトタウンまで、いくつか町や村がありますから、ゆっくり行きましょう」

ルークは急ぐ気はないらしい。伝令では、直ちにと言われたのだが、「よししゃあサンライトタウンに出発だあ！！！」

こうしてアスカ達はサンライトタウンに向かつのであった。

第一十一話「焼け跡」（後書き）

次話「料理の町」

## 第一二三話～料理の町～（前書き）

伝令を聞き、ホーリーナイツ本部があるサンライトタウンにアスカ達は、向かうことになった。

## 第一二三話／料理の町へ

あれからアスカたちはロウグを出てひたすら北東へと歩いた。平坦な道が続くだけ。まわりの景色はちつともかわらない。正直うんざりしてきた。

アスカはちらりと3人の方を見る。

アスカだけでなく、クレアやハロルドの顔もかなり氣だるそうだ。ただルークだけが涼しい顔で歩き続けていた。

「あ、町だ！」

隣を歩いていたクレアが嬉しそうな声を上げた。

前を見ると、確かに小さく家が集まっているのが見えた。

「何とか日没までに到着できそうですね。恐らくあそこは料理の町『ディッシュ』。食通の間では有名な町ですね」

「料理の町……ということは食いもんがおいしことか？」

「そういうことです。今日の夕食は期待できそうですよ」

「・・・よしつ！…」

ルークの言葉に、アスカはひそかにガツッポーズを取った。

町に入り、まずは店を探そうということになり、4人は町の中を彷徨つた。

が、さすが料理の町というだけあって店の数が半端じゃない。レストラン、喫茶店、ラーメン屋、料亭。

ありとあらゆる種類の店が所狭しと並んでいる。

「ラーメンがいい！」

「僕はあつさりしたもののがいいんですが」

「俺はカレーだな」

「俺ステーキが食いたい」

・・・全員の意見はバラバラだった。

どうするか悩んでいると誰かが声を掛けてきた。

「パスタなんか如何ですか？さっぱりしたのか」「うてりしているまで沢山ありますよ」

「お姉さん誰？」

ハロルドが尋ねるととても素晴らしい笑顔を浮かべて答えた。

「リザという者です。近くでパスタを扱つたお店を経営しております」

「ねつパスタにしようよーーー！」

「そうだなーたまにはパスタもいいかな

いつもしてリザのお店に行くことになった。

第一二三話「料理の町」（後書き）

次話「パスタ」

## 第一十四話／パスタ／（前書き）

料理の町ティッシュに訪れたアスカラ達は、リザの経営する店へ行くことに。

## 第一十四話「パスタ」

「ふううまかつたあなんて言つが、懐かしい味だつた」

「私も久しぶりのパスタだつたので大満足ですよ」

リザの作ったパスタは、どこか懐かしい味がして、おいしい。皆、大絶賛だつた。

「おいしかつた？ よかつたわ、喜んでもらえて。そうだ、泊まる所まだ決まってないわよね？ よかつたら家に泊まつていいく？」  
リザは感じがよく、優しかつた。一同はリザの言葉に甘え、泊していくことにした。

リザのお店は、パスタ中心の料亭と宿泊施設が一つになつた宿であつた為、風呂も大きかつた。

「おお～～風呂でっけえ～～！」

「俺こんなでつかい風呂初めてーー！」

アスカとハロルドは、はしゃぎ回つていた。

「走ると転びますよ～」

ルークは、はしゃぎはしなかつたが久しぶりの広々とした風呂に少し喜びを感じていた。

「こここのところ、支部の小さなお風呂借りていましたからねえ～。気持ちはわかりますが、もう少し大人しくしていくください。でないと本当に転んでしまいますよ」

ルークが言うと、案の定ハロルドは派手に転んだ。それを見て笑つていたアスカも続くよう転んだ。

「はあ・・・だから大人しくしてくださいと言つたでしょ～。ゆつくりお湯に浸かつて体の疲れをちゃんととつておい・・・」

ルークが喋つているとアスカ達は、それをまったく聞かずに湯に思いつ切り飛び込んだ。

ザツパアアアアン！！二人が飛び込んだ勢いで水しぶきがルークに勢い良くかかつた。それから暫くルークが口を開くことはなかつた。

「ふふつアスカ達はしゃいでるなあ～。まつこんなに広いんだもん当然かな？・・・やつぱり、女の子一人だとこいつの時ひょっと寂しいなあ」

クレアがお湯に浸かりながらつぶやくと、リザが入ってきた。

「うわあっ！！」

リザはさつきまで髪を結んでいたのだが今は髪を下ろしていた。それがとても魅力的だつた。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。もしかしてさつきの独り言聞かれたくなかった？」

「うつ・・・さつきの聞いてたんですかあ？」

リザはクスッと笑うとまた話を始めた。

「あなた可愛いわね。大人っぽいし、モテそうだわ」

「そんなことないです。リザさんだつてすごく美人じゃないですか」「ふふつありがとう。さつきの独り言からすると、もしかしてあなた彼のことが好きなの？えつと確かアスカ君だつたかな？」

「ちつ違いますよつ」

クレアは、顔を真つ赤にしながら言つた。それは、あまりにもわかりやすい反応だつた。

「わかりやすいわね、本当に」

「リザさんのいじわる～」

クレアはちょっと泣きそつだつた。

「そう言えば、リザさん、結婚していないんですか？」

「してるわ。でも主人先日亡くなつたの。正確には殺されたみたいなんだけど」

その言葉にふとあることがクレアの頭の中に浮かんだ。

「私の夫は、ホーリーナイツの隊員でライザつて言つたの。結構名が知られてたのよ。でも死んでしまつたわ」  
クレアの想像通りだつた。クレアはリザに申し訳なくなつた。  
「すみません。なんか悪いこと聞いちゃつて」

「いいのよ。あなたは悪くないわ。それより、今夜町の中心あたりでお祭りがあるからアスカ君と行つてきたら？」

「本当ですか？でもアスカ来てくれるかな？」

「大丈夫きっと来てくれるって」

「はい！！」

クレアはアスカを誘おうと風呂から上がり、アスカ達の部屋に向かつた。

第一十四話／パスタ／（後書き）

次話／『二人きりの祭り』／

## 第一十五話／一人きりの祭り／（前書き）

リザに言われ、クレアはアスカを祭りに誘い、アスカと一緒に町へ向かっていった。

## 第一十五話「一人生の祭り」

クレアはリザの助言に従い、アス力を祭りに誘つた。

ナリと云ひたのだ。

2人きりで祭りを楽しみたかったクレアだが、アスカを連れて行くとき、ハロルドに見つかってしまい、もう少しでついてこられるところだった。

モナコノロリトのことは何間だと思ってゐるが、二人きりの時間

力をかけてくれたおかげで、こうして2人きりで出かけることができただのだが。

あ、ねえねえ、金魚すくいだよ金魚すくい！ ね、やろー！」  
「やろつたつて、金魚取つたところで俺たちじや飼えないぞ」「リザさんこ銅つてもらえばいいよつ！」

「お前が勝手に決めるなよ・・・」

アスカはそういうつもお金を出してくれた。

取ることはできなかつた。

「金魚に怒つたつてしょうがないよ」

始めはクレアがやるうと  
言い出した金魚すくいだが、途中から  
はアスカのほうが熱くなっていた。

「次はあいつだつ！！」

「捕るまで帰らん！！」

「死んだ！」

「なつ……」の「……」だあもひ、逃げんな金魚め！！」

どうやら一匹も捕ることができないのが悔しいようだ。断固たる決意で金魚をすくうアスカを見てクレアは、優しく微笑んだ。

と、そのときだつた。

「…………あれ？」

クレアは思わず声を上げた。

「あ？ どうかしたか？」

「……あ、いや、なんでもないよ

「ふうん？」

アスカは不思議そうに首を傾げたが、それ以上深くは追求してこなかつた。そしてまた金魚をすくい始める。いつになれば、終える事のできるのかわからないこの小さな戦いを。

クレアは見たのだ。溢れる人並みの向こうに、ロウグで「白いコート屋」をやつっていたサロマが歩いていたのを。

「……まさかね」

クレアは見間違いだと思い、サロマのこととは忘れた。

ぱーん。

そこらじゅうに爆発音が響いた。  
が、それはロウグで聞いたような激しい音ではなく、どこか懐かしいような音だつた。

「あ、花火」

クレアが空を見上げて言った。

夜空には美しい火の花がいっぱいに咲いていた。

「おー、打ち上げ花火なんて見るの久しぶりだ」

アスカが少し嬉しそうに言つ。

次々に打ち上げられる花火たちは、一瞬美しく光つては、消えていった。

「綺麗だね」

「ああ、すっげー綺麗だ」

クレアはそつとアスカの方を横目で見た。

目を細めて空を見ているアスカの横顔が、次々に色を変える花火に照らされている。

クレアは幸せそうに、そつと微笑んだ。

第一十五話）一人きりの祭り（後書き）

次話『消えた三人』（

## 第一十六話／消えた三人／（前書き）

リザに言われ、お祭りに行つてきた二人。二人が帰つてくるとそこには誰もいなかつた。

## 第二十六話「消えた三人」

祭りを満喫した2人はリザの家へと帰ってきた。一人の片手には、金魚の入った小さな袋があつた。どうやら金魚を捕る事が出来たようだ。

「ただいまー」

アスカがそう言つたが、返事はない。

2人は顔を見合せた。

「ただいまー」

再び言つてみたが、やはり返事はない。

「どうしたんだろうな?」

何かあつたのだろうか。ただちょっと出かけているだけだろうか。2人が立つ玄関には、本来あるべきルーク、ハロルド、リザの3人分の靴が忽然と消えていた。普通は、靴は履いたまま中に入るのだが、リザは靴を脱ぐように言つていた。つまり、ここに靴がないのは、出掛けている証拠なのだ。

三人を捜すか、ここで待つているか一人は暫く話し合つた。その結果少しの間待つてみるとことになった。

「たくつどこに行つたんだろうな? もしかして俺達を捜しに行つたんじゃないかな?」

「とにかく、帰つてくるのを待つてよう。もしかしたら皆で出かけたのかもしれないし」

居間で、話し合つていると二階から誰かが階段を下りて来る。  
「誰かいるみたいだぞ。ちょっと様子を見に行つて来る」

「気を付けてねえアスカ」

心配そうな顔で見つめるクレアを、背に、アスカは階段に向かう。  
「誰かいるのか?」

「ふわあ〜〜寝ちゃつたよ〜。あつアスカ君お帰り クレアちゃん

んとのデータはどうだった？俺だけお留守番つてのは寂しかったんだぞーー！」

「なんだ、ハロルドか。泥棒かと思つたぞ。それよりルークとリザさんは？」

「一人寂しくお留守番していた人を泥棒扱いするとは、ひどい人だなあ。あの二人ならデート中だよ」

「へえ、ルークがリザさんとねえ。ほつほつほ怪しいですな」  
アスカが不気味な笑みで笑つてゐるとクレアが話し掛けってきた。

「あつと、そんなんじゃな」よ。あのね、リザさんは結婚してるの。でも田那さんは先田くなつたやつだ。その田那さんの名前は『

ライザ・ディスカス』。あのライザさんなんだよ」  
クレアは小さな声で言った。暫く三人の間に沈黙が訪れた。  
り込んでいるとアスカがあることに気が付いた。

「ん？ 待てよ。ハロルドはここにいるのに玄関にハロルドの靴がな  
かつた。なんかおかしくないか？」

そう言いながら、アスカはハロルドの足元を見た。なんとハロルドは、靴を履いたまま、家を歩き回っていたのだ。寝ぼけていたせいだろう、普段の生活習慣が自然にしてしまったのだ。「ハロルドっ异く靴脱いで来ー！！！リザさんこ怒られるぞ！！！」

「うわっ！…やつばあ～ちつさ外に出た時脱ぐの忘れちゃったんだ  
あ」

アスカ達がアタフタしていたその時、ガチャツヒドアが開く音がした。どうやらルーク達が帰ってきたようだ。

「あれ？ もう帰ってきてたんですか？ もうとおりへつしまりもよかつたんですね。」

「せうよ、そうよ～もつとゆっくりしてればいいのよおお  
ルーク達はバーでお酒を飲んでいたらしく、アルコールの匂いがし

た。ルークの意識は、はつきりとしていたが、リザは完全に酔いつぶれていた。ルークは、リザを寝室まで運び、居間に戻ってきた。

「一応誰か人に話しておきたい」ことがあるのであるのですが・・・」

「リザさんの田那さんはライザさんです。だろ?」  
アスカがそう言つと、ルークは一瞬驚いた。

「知つてたんですか」

「ああさつきクレアから聞いたんだ。クレアはお風呂でその話をリザさんから聞いたんだと」

「ねえ~今日はもう遅いし、明日の出るんでしょう? もう寝ようよ」

ハロルドが「ひと一同は、リザに会つた部屋に行き、眠つてついた。

第一十六話「消えた三人」（後書き）

次話「『奇怪な村』」

## 第一一十七話／奇怪な村

翌朝、おいしそうない匂いが漂つてきた。それに誘われるかのようにアスカは目覚めた。出発の準備を済ませてから、階段を下りて居間に向かうとすでにルークとクレアがいた。ルークはいつもどおりコーヒーを飲みながら本を、読んでいた。クレアは朝にもかかわらず、大きな声でおはよう、アスカっと言つてきた。アスカもそれに小声で答える。

「まだハロルドは、起きてきてないのか？」

「昨日一番最初に寝始めたのにね。まるで子供みたいだね」

「そう言えば、ハロルドって歳いくつなんだ？」

「俺は～16歳だよお～。ふあ～眠い眠い」

たつた今起きたハロルドが欠伸をしながら、答えた。

「えつそんな歳だったのか？俺はてつきり同じ年かと思つてたぞ」

「えつ！アスカそれはおかしいでしょ？どう見ても、もっと子供っぽいでしょう～16歳より下に見えるくらいだよ」

ハロルドは実年齢に比べ子供っぽい顔つきだった。

「よく言われる～」

ハロルドが眠たそうに言つた。それを見ていたルークとリザは、お互い眼を合わせてからクスッと笑つた。なんともいい雰囲気だ。

「さつ、冷めないうちに朝ご飯食べましょ！～今日も抜群においしいはずよ」

「よしそうじ飯食べよう」と～～なんかリザさんは、お母さんみたいだなあ。じゃあ、いただきま～～す！」

ハロルドはそう言つて、朝ご飯を食べ始めた。それをクレアは寂しげに眺めた。

ハロルドの両親は白いコートの人達に殺されたんだつたけ～～そなことを思いながらクレアも朝食を食べ始めた。

「さて、朝食も食べ終わりましたし、そろそろ出発しますか」

一同は荷物を持ち、リザの店を出た。

「お世話になりました。俺、任務とか旅行で近くに来たら顔見せに来ます」

「リザさん、お世話になりました。今度お料理教えてください……」「リザさんのこと『お母さん』と呼ばせてください……」というか、もう息子にしてください……」

「お世話になりました。また飲みにでも行きましょう」「一同はリザに挨拶、いや、一通り言いたい事を済ませた。

「また、来てね……おいしい料理作って待ってるから」「手を振りながら一同は、町の出口に向かつた。するとリザが大きな声で叫んだ。

「ルーク！…………あつあの…………また会えるよね？」

もちろんですよ……そう言ってルークはまた前に進みだす。昨夜何があつたんだ……そんなことを一同は思つた。

「ルーク……何があつたんだあ……」

「何もありませんよ。ただ昨日彼女のグチやら苦労の話を聞きながらお酒を飲んだだけです」

「本当かよ？」

ルークは意外に女の子にモテそつだなあ~心の中でクレアがつぶやいた。

こうして一同は、料理の町『ディッシュ』を後にした。

料理の町『ディッシュ』を後にしたあと、4人はいくつかの町や村、集落などを過ぎた。  
そしてとうとう、目的地『サンライトタウン』が見える場所にまで來た。

「ね、あのちょっと遠くに見えるのって……」

クレアが指差した先には、まだ遠いがうつすらと光を振りまいていた巨大なビル群があつた。

「はい。あれが光の都市『サンライトタウン』です」

ルークがビル郡の方を見ながら言った。

「ここまで来れば到着までそう時間は掛かりません。今日はこの近くにある村に泊まりましょ

う」「やつと到着かー。どこでその村つてどこのあるんだ?」

アスカが聞く。

「あと2・3kmといったところでしょう。その村は『レジョンドー』といふのですが・・・。奇怪な村でしてね」

「奇怪?」

「ええ。何度か泊まったことがあります、町全体の空気が重苦し

いんですよ。村たちは何かに怯えているようにも見えました」

「怯えてる、だつて?」

ハロルドが眉をひそめる。

「それにあの村の別名を知っていますか?」

妖怪の村、です

よ

第一十七話～奇怪な村～（後書き）

次話～『レジエンド』～

## 第二十八話「レジェンド」

「妖怪！？」

3人の声がそろつた。

「あわわわわわわ～私は、そんな村に行きたくないよ～オバケとか妖怪とか私はダメなのよ～」

「大丈夫だろ～そんなのいねえよ！！」

アスカがその場に座り込んでしまったクレアの腕を掴み、クレアを立たせた。

「アスカの言うとおりですね。まあ、大丈夫でしょう。私が泊まつたときに、妖怪なんて現れませんでしたからね」

ルークは微笑した。

「確かに空気がどんよりしてるよな。心なしか」  
アスカが呟いた。

村全体に活気というものがないように思える。

「お、おい、あれを見る」

不意に4人の前に現れた村人の男が驚いた顔で4人を指差していた。

「お、おお！　あ、あれは」

「も、もしや！」

「救世主様だ！」

男の声に集まってきた村人たちには、みな一様に4人を見て驚いた顔をしていた。

「何なんだ、一体？」

アスカが困惑氣味に言つた。

と、そのとき、村の奥のほうから1人の老人がゆっくりと歩いてきた。

「紅の少年と蒼の青年、銀髪の少女と童顔の少年。4人が訪れたと

き、村は救われる・・・

老人は静かな声で言つた。

「IJの村に古くから伝わる言い伝えじゃよ。わしは村長のゴドといふものじゃ」

ゴドは落ち着いた物腰の老人であつた。

「・・・あの、救われるというのは?」

「IJの村は妖怪に取り憑かれておるのじや。もしも君たちが救世主であるのなら、この村を救つてはくれないか?」

ゴドは4人はしつかりと見据えながら言つた。

「どうする?一応俺達急いでるんじやないのか?」

確かにアスカ達は早急に帰還するよう言われていた。

「まあどうせ、ここに泊まるんだからいいんじやない?」

「・・・まあいいでしょ?ゴドさん助けて欲しいとは、具体的にどうして欲しいのですか?」

「・・・いいのか・・・?」

アスカは本当にゴド達を助けるべきか少し悩んだ。もつとも権力のある総司令官からの「直ちに帰還せよ」との命令なのだから、こんな所で道草を食つている時間は無いと考えるのが普通だろう。且と鼻の先に目的地は見えているのだから、一歩でも先に進みたいと言うのが一般的な思想だ。辺りは明るい訳でもないが、日が落ちた訳でもない。次の村か町までは、どう考へても行けそうだというのに。何より、こんな不気味な村にいることがアスカにとっては、一番イヤで仕方がなつた。それが本音だ。

しかし、アスカは頭の中で思つたこと、捨てるにした。

「実は、一週間程前に起こつた事なんだが、山へ行つた若い男たちが帰らないのだ」

「それなら自分たちで探しに行けばいいんじやないか?」

「まあ最後まで話を聞いてください、アスカ」

「おつおつ・・・」

できるだけここにいたくないアスカをルークが黙らせると、ゴドが

話を続けた。

「無論、探しに行ったのじゃ。怪我でもしたのだらうと思い、村の若い男達に救助行かせたのだが結局誰も見つからず、救助に向かった男達も帰つてはこなかつた」

第一十八話「レジエンド」（後書き）

次話『救助』

## 第二十九話「救助」

「要するに、山へ行つて私たちが事件の謎を暴けばいいのね？」  
かなり危険な頼みにもかかわらず、クレアはやる気満々だった。  
「しようがねえなあ、じやあさくつと終わらせて、サンライトタウンに行こうぜー」

「おお～引き受けでくださりますか！！ありがとうござります！！」  
はあ～～っとアスカが溜め息を吐くと、クレアとハロルドが走つて  
山の入り口まで行つてしまつた。

「何やつてんのよ～早く行こうよ～！！」

「なんでそんなに急いでんだよ～！クレアもハロルドも！！」

「よくわかんないけど、クレアちゃんが急いでるから早く行こう～！～！」

どうやらハロルドは、クレアが走り出したのにくつ付いて行つただけの様だ。

「さて、あいつら行つちまつたし、俺達も行こうか

「そうですね～」

二人が歩き出そうとした時、ゴドが一人を呼び止めた。

「お一方！！一つ忠告がある、この山には獣があるのじゃ。普段は、  
獣除けの薬を身にまとつたが生憎薬をきらしていいて・・・だから  
氣をつけて行くのじゃ」

「そういうことは、もっと早く言えっての～！」

「まあまあ、私達の旅は元々危険なんですから  
ルークに言われ、ムスッとした顔でアスカは歩き出した。  
こうして山の入り口へアスカ達は、向かうことになった。

山には鬱蒼と木が茂つていて、まだ昼間なのに薄暗かつた。

4人はそんな中を当てもなく歩き続ける。

「どこにいるのかなあ、村の人たち」

あたりをきょろきょろと見回しながらクレアが呟いた。

「見当もつかねえよ。こんなとき、ライザさんがいればなー」

アスカはそう言ってから黙り込んだ。

ライザはもう、この世にいないのだ。

この沈黙を断ち切るかのように、ルークが口を開いた。  
「油断だけはしないでくださいね。獣に襲われてもすぐに応戦できるように」

ルークがちらりと3人を横目で見ながら言った。

「分かつてるとお。・・・ん？」

ハロルドが前を見て声を漏らした。

「あれって、洞穴じゃないかな？」

ハロルドの指差す先には、切り立つた崖があり、岩に大きな穴が開いていた。

「巨大な洞穴ですね・・・。中を調べてみましょう」

「うつわあ～なんかワクワクするねアスカッ！」

「バカッ！！人の命が、かかってるかもしれないんだぞ！…そんな事言つてる場合かつての」

アスカが怒った為、クレアがしょんぼりしてしまい、辺りが静かになつた。静まり返つた山は、不気味さを増した。

そして、4人は小走りで洞穴のほうに向かつた。

第二十九話『救助』（後書き）

次話『拳』（

## 第三十話「拳」

洞穴の中は真っ暗でとても明かりなしでは、中には入れなさそうな場所だつた。

「おーい、誰かいるかー？」

アスカが声を張り上げた。

すると穴の奥からも「おーい」という言葉が返ってきた。

「中に誰かいるんだ！！！」

クレアがぱつと顔を輝かせる。

「行つてみましそう、中は真っ暗で危険です。なるべく固まって行動しましょう」

4人は頷き合い、中に入ろうとした。が、そのとき。アスカたちは背中にぞくつとするものを感じた。何かが重くのしかかるような、そんな感覚だつた。

4人が同時に後ろをパッと振り返ると、そこには身の丈4メートルはあるうかという巨大な獣が立っていた。

「うわっ！！」

「でかつ！！」

「こわっ！！」

アスカ達の反応は、期待通りだつた。

アスカとハロルドは、装備していた武器を構え、クレアは数歩後退し、杖を構え体勢を整えた。が、しかし、ルークは武器も構えずに黙り込んでいた。

「何やつてんだルーク！！危険だぞ！！」

そう言うとアスカは、いつでも魔物の動きに対応できるよう、体制を取つた。

「・・・待つてください。彼は敵ではありません」

ルークの言った言葉の意味を理解するのにアスカ達は少し時間がかかった。今にも太くて大きなその拳が、アスカ達に落ちてきそうな

のだから当然だ。

「どういう意味なのルーク？」

クレアが尋ねると、ルークが口を開いた。

「彼はこの山に住む、伝説の獣人の一人です。彼の持つ拳の硬さ、強さは魔物の中で世界最強クラスと言われている程です。彼の名は、その伝説級の拳に因んで『ファイスト』と呼ばれています」

「で、それが攻撃してこないってことど、どう繋がるんだ？」

「彼は、人間にその力を貸してくれる、『存在』なんです。この世には、旋律師、ああ旋律師と言うのは、呪文を主な戦闘方法として戦う人のことです。呪文を発動する際、詠唱を詠うと言う旋律を奏でますから旋律師と言うんです。それから魔術を主に使う魔術師、そして彼のような魔物を召喚し、戦わせる『召喚師』がいます。つまり、魔物は魔物でも彼は味方なんです」

「そういうことだ・・・」

低くて、背筋にゾッとするような声が聞こえた。

「試したんですか？『村』の人々が私達を『

「？』

「そのとおりだ。この村に来た時に村の者がいなくなつたと言われたと思うがそれは嘘だ」

この展開に、アスカやクレアは、もちろんハロルドも付いていけなかつた。

## 第三十一話／召喚師

「……は？ 試したって一体どうこうことなんだ？」  
アスカが混乱したように言つ。

「それに村の人たちが嘘をついてたって……？」

「ええ、その通りです」

ルークが冷静に言う。

「文字通り、私たちはこの村の人々に試されていたんですよ。……あなたを召喚したのは、あの長老の方ですか？」

ルークはフィストを見上げながら言つた。

「その通りだ。あいつは熟成された召喚師なのだ。この村で私を召喚できるのも、奴ぐらいのものだな」

「だー！ ちょっと待つた！」

2人で勝手に話を進めていくルークとフィストに、ハロルドが待つたをかけた。

「一体どういうことなのか、きちんと説明してよねえ！」

ハロルドの言葉に、アスカとクレアもうんうんと首を縦に振る。  
ルークが説明をしようと口を開きかけたそのとき、洞穴の奥から人の声が聞こえてきた。

「そのことについては、わしが話そう」

ゆっくりとした歩調で歩いてくる人物。

この村の村長にしてフィストを召喚した召喚師

「ゴドだつた。

「長老、どういうことなのか説明してもらえますか？」

ルークが長老に問いかけると、長老は、その答えをすぐにかえした。

「実はな、最近になつてこの村にある『太陽光（ライト オブ ザ サン）』と呼ばれる伝説の杖、つまりこのわしの持っている杖を奪おうとする輩が後を絶たないのじや」

「その杖ってなんか凄いのか？ まあ確かにデザイン的にも凄いとこ

ろはありそりうだけど・・・」

アスカが杖を見ながら語つとゴドは話を続けた。

「この杖はな、光属性の魔物を召喚しようとする術者に、力を貸してくれる不思議な杖なのじや。きっとこの杖には、大量の光の魔力が込められておるんじや。召喚術だけではなく、光の魔法や呪文にもその効果を与えてくれるだろう。この杖は、魔術、呪文、召喚術を扱う者にとって最高の杖なのじや、ただし、光属性の術にしか効果を与えないのじやがな」

ゴドが説明を終えると、ルークがそれをまとめるかのように言った。  
「つまり、私たちがその杖を、奪いに来た者ではないか試したと言ふことですね？」

「そのとおりじや。すまなかつたな、しかしおぬし等は、見事試験を突破した。村の者全員で、もてなすぞ」  
ゴドは、そう言つて村へ帰つていった。

第三十一話「召喚師」（後書き）

次話「『真の名』」

## 第三十一話「真の名」

「なあ～どういう基準で俺たちは試験に合格したんだ?」

「そうそう、俺も気になつてたんだよねえ」

アスカとハロルドがそう言うとクレアが口を開いた。

「たぶん、フィストさんが現れた時、私たちに殺意があつたか、なかつたか、とかそういうのだと思うよ」

「まあ、そんなところでしょうね。少なくとも今まで奪いに来た人達には殺意があつたんでしょう」

「あの状況でそんなこと見極められるんだあ～凄いなここの村の人達は」

「もしかしたら、あの杖を守る為に特化した能力なのかもしれませんね」

「てことは、ここは優しい人しか集まらない不思議な町になるんだね!!」

クレアの考え方には、一同は小さな平和を感じた。アスカはもちろん皆、ホーリーナイツとイビルナイツで対立している今、この小さな平和がもっと大きなものになることを願つた。

その後一同は、少しその場で休憩してから村へと向かつた。

「よくぞ戻られた!! 今夜はこの村でゆっくりしていつてくだされ」長老が帰ってきたアスカ達を歓迎し、暫く話し込んだ後、村人全員に聞こえるように大きな声を出すと、村人が家から飛び出し、村にはお祭りのような活気があふれた。久々の宴だつた。その為、先程とは比べ物にならないほどの活気が村にあふれていた。

「久々の客人だあ～朝まで楽しむぜえ!!」

「よつしゃあ～!! まず、俺はお嬢ちゃんを口説いて・・・」

「バカッ!! あの子の隣にいる紅い髪の男の子、どう見ても彼氏だろう? お前じやあ敵うわけがないだろ」

「やつてみなきゃわからない・・・と言いたい所だが、彼には勝てる気がしないな。かなりいい男なんじゃないか？」

アスカはモテモテと言う程ではなかつたが、わりと顔のいい男だつた。しかし、性格が大雑把な為、クレア以外の女の子に、好意を持たれる事はほとんどなかつた、いや、無に等しかつた。

「よつしやあ～ハロルド！！美味そうなもん食いまくるぞ～～～！」

「わ～い、美味しいもののお祭りだねえ！！」

祭り好きのアスカは、興奮し、ハロルドはアスカのマネをするかのように興奮した。

「はあ～アスカもハロルドもはしゃぎ過ぎないでね」

一方、アスカ達が村ではしゃいでいる頃、ルークは、長老と話をしていた。

「これは、推測なんですが、杖を狙つてきた輩というのは、白いコートを着ていた者ですか？」

「いや、多分違うと思うのじゃが、もしかすると、そのような輩もいたかもしね」

「・・・そうですか。それからこの杖は、光属性と言つていましたが、やはり相反する存在があると推測できる、その事から、闇属性の杖があると考えられます。闇属性の魔術や呪文は、とてもなく強く、恐ろしく危険なものです。つまり、術者の能力をサポートする光の杖が存在するならば、闇の杖は闇の魔術や呪文のリスクを軽くしたり、その効果を倍増させることの出来る可能性があり、その存在は脅威です。こちらの杖が狙われていないとすれば、白いコートの奴らが狙うのは、こちらの闇の杖である可能性が高いしじう。そこで頼みたいのは、その闇の杖についての情報です。お願ひできますか？」

「いや～これは恐れ入りました。この杖の存在だけでここまで、たどり着けるとは。・・・確かに闇の杖は存在するのじゃが、そのあまりの強さに扱えるものおらず、杖の力が暴走するだけ。それを危険に感じた、ある一部の杖関係者がその場所や詳細を極秘で隠した

のじや。私が知つてゐるのはこれぐらい。能力等はあなたの推測どおりじや」

「・・・ですか。貴重な話をありがとうございました」

ルークの顔は、少し満足げな表情を浮かべ、またいつもの冷静な顔つきへと戻つた。そしてまた口を開いた。

「では最後にもう一つ、なぜ、ここは妖怪の村と呼ばれているのですか?」

「はつはつは、それは、杖の場所を誤魔化そうとしているだけですべ。この村の本当の名は『精霊の村レジヨン』」

第三十一話「真の名」（後書き）

次話「サンライトタウン」

## 第三十一話 サンライタウンへ

翌朝、『精霊の村レジョン』の村民たちからの盛大な見送りを受けて、アスカたちは村を発つた。

「いい人たちだつたねー」

ハロルドが言った。

「フィストさんがいきなり出てきたときにはどうなるかと思つたけど」

クレアが苦笑しながらそう返す。

「それにも・・・」

ルークがやや氣の重たそうな声で言った。

「本当に受け取つてよかつたんでしょつかね、こんな貴重なものを」

そういうルークの手には『太陽光』が握られていた。  
村長のゴドが、ぜひ持つていいってほしいといったのだ。

「近頃はこの杖を奪おうとする輩が増えて困つておるんじや。わしが生きているうちはいいものの、もしものことがあつたとき、この杖を守りきれるか不安なんじや。この杖を守る意味でもぜひ、持つて行つてほしいんじや」

ゴドの言葉に、ルークは反射的に受け取つてしまつたのだ。

「いーんじやねえの？ あつて困るもんじやないだろ？」

「それはそうですが・・・」

ルークに背中には「責任」の二文字が重くのしかかつているらしかった。

「ね、あたし思うんだけど、もしかしたらゴドさんたち、もうひとつ意味であたしたちを「試してたんじやないかな？」

「もうひとつ意味？」

「うん。その杖を託すのにふさわしいかどうか」

クレア以外の3人は「あ」と声を上げた。

「だから深く考えなくてもいいんじゃない？」もしかつだつたら、一応あたしたち、合格つてことだもん」

「なるほど、そうですね」

ルークはようやく少し緊張をほぐしたようだつた。

「・・・」

「どうしたの、ルーク？」

「いえ、なんでもありません。ただ・・・」

「ただ？」

「クレアにしては、珍しくいいこと言つたつと想つていただけです」

「ちょっと、それどういう意味よ！？」

「まあ・・・そのまんま、ですかね？はははははつ

ムスッとしているクレアを、あざけるような声でルークは笑つた。  
それがとても嫌味な感じだつた。

「まあそんなことは、おいておいて。クレア、この杖はあなたが持つていてください」

「えつ、どうして？それはルークが持つていた方がいいんじゃないの？」

「いえ、私よりあなたが持つていた方がこの先のことを考へると都合がいいんですよ。あなたはまだ魔力の量が少ないのでし、光の呪文を扱うこと前提に修行しましたしね」

「なんか不安だなあ～この杖私に守れるかどうかわからぬよ。・・・  
・もしかして、私に責任を押し付ける為に渡したなあルーク！！」

「あはは～バレましたか。まさつき言つたことも嘘ではありませんよ。私が持つよりあなたが持つた方がいいことは確かですから」

「じゃあお言葉に甘えて使わせて頂きます」

「・・・さて、ようやく到着しましたよ

ルークが感慨深げに言つた。

現在時刻午前11時25分。ようやくサンライトタウンに到着したのだ。

「ここが・・・ホーリーナイツの本部がある都市・・・」

目前に見えるその街並みを見ながら、アスカが呟く。

「さあ、行きましょう。　　ホーリーナイツの、本部へ!」

ルークの言葉を合図に、4人は歩き出した。

第三十二話 サンライトタウンへ（後書き）

次話へ ホーリーナイツ本部へ

## 第三十四話 ホーリーナイツ本部

遠くから見たこの町は、ビルばかりに見えるが実際に町に入つてみるとなんとも、和やかで平和を感じさせる不思議な町であった。この町の道路は白いレンガや石のブロックで構成されていて、町の所々で人工的に造られた小川や噴水などが見られ、小さな滝などもあり、清涼感の漂う居心地の良い所だった。

「うわあああ、キレイ！」

「遠くから見た景色とは、全然違うって言つか違う場所に来たみたいだ」

「俺、この町大好きだなあ～始めて來たけど懐かしい気がする」  
アスカ達は感動の声を上げた。辺りを見回した後、目を正面に向けると遠くから見た物と同じであろうビルがアスカ達の目に映った。

「あつあれが、本部？」

「はい、あのビルの最上階にダーヴァ総司令官がいるはずです。さつ行きましょう」「う

「おつき～い。流石ホーリーナイツの本部今までのビルとは違つて  
断然大きいね。すごいなあ～」「よっしゃつ、行こうぜ！～！」

アスカは勢いよく走り出した。それに一同はついていき、本部のビルに入つていった。

「ルーク准将、最上階にて総司令官をお待ちです。入室許可は出で  
いるので、部屋の前にいるガードの人にはこのカードを見せれば通し  
てもらえます」

「わかりました。・・・まあ皆さん、受付も終わりましたし、上に  
行きましょう」

階段やエレベーターを使い、上まで一同は上つていった。

「はあはあはあはあ・・・」この階段きつかったな・・・

「すみませんねえ、変な造りで。総司令官の趣味というかなんと言  
うか、健康には気を使う方なのでこれも健康の為と言つてわざわざ  
造り直したんですよ。階段だけ……」

ルークは何かを思い出すかのように言つた。どうやらこの階段はホ  
ーリーナイツの隊員達の手によつて、リフォームされたらしい。

「ここですね」

「カードキーを、ルーク准将」

ガードの男がそういうと、ルークは先程の受付嬢から受け取つたカ  
ードキーを男に手渡した。

「ピッ・・・ロック解除。ドアが開きます」

「どうぞ中へ」

装備していた武器をガードの男のに預け、中へと一同は入つた。す  
ると、窓の前にある高そうなイスに一人の男が座つていた。

「遅かつたね、ルーク准將。私は待ちくたびれてしまつたよ。何か  
あつたのかな?」

微笑みながら淡々と言いたい事言つダーヴァにルークは、「何もあ  
りませんでした」と嫌味な笑顔で答えた。

「まったく、君はマイペースなのか、ただ単に遅刻が癖なのかわか  
らないよ。はつはつはつはつは」

笑うところじやないだろう……。アスカは心の中で小さく呟いた。  
「それより、ダーヴァ総司令官。我々をここへ呼んだどこのことは、  
何か用があるのでないですか?」

ルークが本題を切り出すと、ダーヴァ先程とは違う真剣な目つきで  
口を開いた。

「……单刀直入に言つ、先日イビルナイツ最高司令官のヴァイス  
総司令官から宣戦布告の通知が届いた」

「……」

第三十四話 ホーリーナイツ本部（後書き）

次話「宣戦布告」

## 第三十五話／宣戦布告

「宣戦布告！？」つまり、近日中に戦争が起ころうてことなのか？」  
あまりにも突然過ぎた為、アスカもクレアもハロルドも、ルークで  
すら驚きの表情を隠せなかつた。

「そのとおり。我々も近いうちに決着をつけよつと思つていたところだつたのでな。これで戦う理由が出来たといふことかな」

「それで、俺達を呼んだってことは、俺たちにも戦争に参加してくれつてことなのかな？」

「『』名答、そのとおりだよ。えつと名前は確か、ハロルド君だったかな？」

ハロルドは、にこりと微笑みながら「はい」と言つた。しかし、ハロルドの表情には、いつものあざけなさはなかつた。

「そうか、君があの・・・」

「総司令官さん、そこから先は言わないでくださいねえ」

「・・・そうか、すまなかつたな」

「？」

「なんでだ？ ハロルド」

「なんでもないよ。気にしない気にしない」

一同は、気になる気持ちを抑え、本題へと話を戻した。

「あの、それで決戦の日はいつなんですかあ？」

「君はクレアさんかな？ 決戦の日は、2週間後になる。各自準備を怠らないように」

「了解しました。他の隊にはこのことは連絡済なんですか？」

「無論、君が一番最後だよ。それから一つ頼みごとがあるのだが・・・」

「・・・そうでしたか。で、頼み事とは？」

ルークは軽く笑いながら、話を聞いた。

「今週中に完成する予定の魔導砲の魔力増幅装置に使用する筈のマ

ジックストーンと呼ばれる鉱石が足りないようでな、すまないが採りに行つて来てくれるかな?」

「場所はどこですか?」

「アレクトリア鉱山地帯だ。行き方はわかるな?」

「・・・了解しました」

「失礼しました」そう言つてアスカ達はダーヴァのいる部屋を後にした。

「魔導砲ってなんだ?」

「魔導砲と言うのは、今我々の研究チームが開発している兵器のことです。使用者の魔力を魔力增幅装置に集めて、高密度の魔力をエネルギー弾へと変換して敵を攻撃するんです。魔力增幅装置に込められた魔力は、エネルギー弾に変換する前に魔力增幅装置内で高圧力で圧縮し、エネルギー弾として発射されます。弾数は使用者の魔力の量、つまり、魔力の量が多い者ほど有利になるんです。アスカにはピッタリの武器ですね」

「へえ、なんだかわかんないけど、すげえ武器なんだな魔導砲つてのはさつ」

「さつ日没までにアレクトリア鉱山地帯付近へ行きましょう。この時間帯ならまだ日の沈む前には到着できる筈です。鉱山地帯の近くに鉱山の町アレクトリアがある筈ですから、今日はそこで一晩過ごしましょう。マジックストーンは採取量が多くは無いのでなるべく早くから作業に取り組まないと決戦に間に合いません。期限は大体一週間、それ以内に必要な分採取できるように心掛けて置いてください。それと採取中は坑道内に入る訳ですが、魔物の出現の可能性もありますので、戦闘が起きてもいいように各自注意しておいてください」

「じゃあ、出発」

クレアの掛け声と共に、アレクトリアへと向かつ一同であった。

第三十五話 宣戦布告（後書き）

次話「鉱山の町」

## 第三十六話 鉱山の町

それから一時間後、夕日も大分傾いてきたころに、四人は鉱山の町『アレクトリア』に到着した。

この町はアレクトリア鉱山地帯で武器や防具の加工などに使う鉱石の発掘等を行うもののために作られた、比較的新しい町である。町ができる以前は、発掘者たちは就寝や食事も鉱山内で行っていた。ほぼ24時間、鉱山内にいたのである。そのため魔物に襲われる率が高くなり、アレクトリア鉱山で発掘をするものは次第に少なくなつていった。

しかしアレクトリア鉱山は数少ないマジックストーンが採取できる鉱山である。

何とかできないかと考えた末に、鉱山の近くに町ができたのだ。そのおかげで発掘者たちは発掘作業中以外は町にどどまるようになり、魔物に襲われる率も減つた。

もちろん魔物が鉱山内に多数存在しているのは確かなので、まつたく襲われないというわけではない。むしろ弱い魔物ならばよく出てくる。

が、それらは油断さえしなければ一般人でも倒せる本当に弱い魔物なのだ。

今までは食事中、睡眠中を襲われ、弱い魔物相手でも命を落としてしまう発掘者が多数いたが、町ができた今は、それもかなり少なくなっている。

しかし鉱山内にはじく稀に強い魔力を持つ魔物が現れることがある。めったに出ではこないのだが、運悪くそんな魔物に当たつてしまつたときは、あきらめるしかない。

もしくは、町で用心棒を雇うという手もある。腕は立つが仕事がないというものがこの世には結構いる。この町にはそんなものたちが集まつてくる。なぜなら、この町でなら鉱山内でのボディーガード

「こう、自分達の力が役に立つ仕事がもらえるからだ。この用心棒がいれば、もしも強い魔物に出会つても、逃げ切ることぐらいはできる。」

この用心棒達のおかげで、鉱山内で魔物に殺されるものは、もうほとんどない。

それはやはり、この町の功績によるものが大きいと言えるだひつ。

「うわ～っ。みんな泥だらけで、ご苦労様って感じだね」  
「鉱山内は、汚れますからねえ。これから私たちもあのよひになりますから」

「作業用の服でも買つておいた方がいいんじやないか？」  
「賛成だね～。俺も服汚れるのイヤだもん」  
「私も同感です。まず、服を買いに行きましょ～。」  
「じゃあ、あそこ見える洋服屋さんで、買い物しようつよ

それから1時間ほど経ち、それぞれが買つてきた服を着ていた。

「どう？このワイルドで丈夫そうな服はつ～！」  
「おっいいですね～アスカは、服のセンスがいいんですね」  
「そういうルークも似合つてるわよ～。その作業用のつなぎ」「クレアちゃんも可愛いよ～、でも鉱山で働くにはちょっとねえ～。  
・」

「えつそつ～ぱっちり働けそなんだけじなあ

「どう考へてもそれは作業には不向きだろ～」「ひの心は一瞬一つになつた。

「ハロルドは、アスカに似てますね～」  
「あつこれね、アスカ君と一緒に選んでもらつたんだあ  
「どうだつ～！なかなか似合つているだろ～？」  
「すゞい似合つてるよ～！アスカ～なんで私の服も選んでくれなかつたの？」  
「えつあついやその、ねえ～。女の子の服つて選び難くて・・・」

「さつ宿へ向かいましょ。日がすっかり暮れてしましましたし、  
なにより服選びに疲れてしまいました」

「そうだなっ、俺も疲れたよ。今日はもう休んで明日からしつかり  
働いて、さくつと任務終わらせちまおう」

一同は宿へ向かい、体を休めた。

第三十六話 鉱山の町（後書き）

次話『古びた坑道』

## 第三十七話「古びた坑道」

「あー、疲れたー！」

アスカは宿に着き、自分の部屋に入ると、ベッドにそのままダイブした。

「自分で言つのもなんだけど、将来的にはスタイルリストにでもなれるんじゃないかなあ？」

先程褒められたことに、自信を持ち冗談交じりの独り言を、アスカはこぼした。

ベッドに寝転がりながら、アスカはダーヴァが言つた言葉を何度も頭の中で繰り返していた。

『・・・単刀直入に言つ、先日イビルナイツ最高司令官のヴァイス総司令官から宣戦布告の通知が届いた』

「戦争が始まる・・・」

そう考へると、何だか、自分の体が熱っぽくなるのを感じる。

語彙の貧弱なアスカは、自分の気持ちをうまく言葉にできない。簡単な単語で言つならば、それは興奮と不安の入り混じったものだつた。

イビルナイツとの戦争。

もちろんそれは命がけのものになるだろう。もしかしたら、アスカだって死んでしまうかもしない。不安だ。

しかし、それとは逆に興奮している自分もいるのだ。自分がどこまで戦えるのか試してみたい。そんな気持ちが、アスカの中にはあった。

不安と興奮、興奮と不安。

相反する二つの気持ちが、アスカの中で交じり合っていた。

アスカは天井を見上げ、ぎゅっと拳を握り締める。

しばらくして拳をゆっくりと開くと、アスカは小さくため息をついた。

いくら悩んでも仕方のないことだ。それは、わかっていることなのに悩んでしまう。不思議な気分だ。

そんなことを呟きながら顔をパシッと叩き、気持ちを切り替えた。もう寝よう。明日は早い。

アスカは目を瞑つた。

翌朝、乾いた日差しが、アスカの顔を照らした。和みを感じる」との出来ない光だった。

「こんな朝日もあるんだな・・・」

アスカはゆっくりと目覚めた。

「さて、着替えて支度するか」

アスカが着替えようと寝巻きを脱ぎ始めると、ドアを誰かが叩いた。コンコン・・・

「アスカ～起きてる？」

「ああ～、起きてるよ」

「みんなもう～」飯食べてるよ・・・着替いたらロビーに来てね」「はいはい」と

返事をすると、またゆっくりと着替えをアスカは始めた。

「おはよう、アスカ君っ！～！」

「ああ、おはよう」

ハロルドにアスカは静かに挨拶をした。

「おや、アスカ元気がありませんねえ。具合が優れないんですか？」

「いや、戦争前だからさ、いつまでもはしゃいでいられないなって思つてた・・・」

「はしゃぐのと元気がないのは違いますよ。今のアスカは元気がな

いだけです。そう深く考へても仕方ありません。

今は、今やるべきことにだけ集中しましょつ。戦争まで時間はまだあつめす

「せうだな・・・。ナビ、ヤツぱつすこしは先の事を考へなこと」

「まあ確かにね、私たちもいつまでもへりへりしてられないよね」

「ルークさんはともかく、俺やクレアちゃん、アスカ君は戦闘慣れしていないしね」

「まあ～坑道内は魔物が出ますし、戦い慣れるのに何時間は掛からないと思います」

「それは、いいんだけどさ～。強過ぎる魔物は出でてきて欲しくないなあ

「弱い者と戦い続けても、強くなれません。自分より強い者と戦つ事でその強い相手から沢山の事を学ぶのですよ」

「まあ～強いのが出てきたら、それはそれでやるしかなこみつ

「ああ、せうだな」

「せう、そろそろ坑道へ向かいましょつ～！」

一同は支度を済ませ、マジックストーンが最も多く発掘できるといわれてゐる「古びた坑道」へと向かつて行つた。

第三十七話「古びた坑道」（後書き）

次話「坑道内」

## 第三十八話／坑道内

坑道内は、数メートルおきに壁にランタンがともしてあり、人の手が加えられているのがよく感じられた。

この「古びた坑道」は最もよくマジックストーンが取れる場所といふことで、やつてくる発掘者も多い。

他の坑道がどうなっているのかは知らないが、少なくともこの坑道内においては、明かりの保障はなされているようだ。

「ね、そういうえばさあ」

坑道内を歩きながら、クレアが不意に声を上げた。

「この坑道、一週間くらい前に、行方不明者が出たらしいよ」

クレアの言葉に3人は驚いたような顔を彼女に向けた。

「あ、これ、別に正確な情報ってわけじゃないんだけど、町の人說話してるの、たまたま聞いちゃったんだ」

「この坑道内で行方不明事件・・・、知りませんでした」

ルークが少し難しい顔をして呟いた。

だがその情報をルークが知らなかつたのは、仕方ないことだつた。もともと魔物が出る危険性があるこの鉱山で、行方不明者が出たところでそう珍しくはないのだ。

魔物に殺される率は確かに以前と比べて格段に減つているが、それでも他の地に比べれば、その率が高いのには違ひない。

だから行方不明者が出てたところで、町ではそう大きな話題にもならないのだ。

まして行方不明からもう一週間たつている。

町のものたちは、もうほとんど行方不明のことなど話題にしない。クレアがたまたま情報を聞けたことが、幸運だつただけなのだ。

「ここで行方不明つてことは、多分その人もう死んでるよね～」  
ハロルドが言った。

そう。この鉱山で行方不明は、すなわち死を意味する。

おそらくこの坑道内のどこかに、行方不明者の死体が転がっているはずだ。

「行方不明者は一人いて、一人が発掘者、もう一人が用心棒だつて。二人と同行していて、命からがら、唯一逃げ出すことができた発掘者の人の弟子がいろいろ証言してるみたい。その人の話によると、二人は魔物に殺されたんだって。だから一応行方不明者扱いになつてるけど、二人ともほぼ100%、死んでると思う」

「用心棒がいて、それでも殺されたのか」

クレアの言葉を聞き、アスカが呟いた。

この町にいる用心棒たちは、みな腕が立つものばかりだという。事実、この村に用心棒が居つくようになつてから、坑道内での死亡率はぐんと減つたのだ。

そんな用心棒がついていても、殺される相手。

そんな魔物が、この坑道内にいるのだ。

アスカは、小さく握りこぶしを握つた。

「あれ、どうしたんでしょう？」

ふと先頭を歩くルークが立ち止まり、首をかしげた。

「どうしたんだよ？」

「ここから先・・・ランタンが一つ残らず破壊されています」

ルークに言われて前を見てみれば、確かに、今アスカたちが立つているところから先に、ランタンはひとつも無かつた。そして地面上に、無残に碎かれたランタンの残骸が見える。

「なんか、壊れてるってよりも壊されてるって感じだねえ！」

「うん・・・私達に、これより先には入るなつて言つていいみたい・・・」

「マジックストーンの採掘場所まではもうすぐですが・・・進みますか？」

ルークは確認するように3人に言つた。

「もちろん！」

「当たり前だよ！」

「ここまで来て帰れるか！」

3人は引き返す気などさらさらないらしい。

ルークは苦笑し、そして壁にかけてあったランタンをひとつ手に取つた。

「では、行きましょうか」

4人はたつた一つのランタンを頼りに、暗闇の奥へと進んでいった。

第三十八話) 坑道内(後書き)

次話) 『魔物』(

## 第三十九話「魔物」

「暗いなあ・・・つたぐ、これじゃあ戦いにくくて仕方がねえよ・・・」

アスカが吐き捨てた。アスカがそういうのも仕方がないだろう。ルークの持っているランプの明かりしか、辺りを照らすものは、無いのだから。

数メートル先は見えるものの、そこから先は何も見えない。敵が来たらとてもじゃないが、反応できないだろう。

幸い、ここまで一本道で、迷う事はなく、前後にだけ気をくばていればよかつただけだった。

「それにしても、どこまで続くんだろう。この道は・・・」  
クレアが周りを見渡しながら言った。クレアは、いつもよりも警戒しているようだ。それは、魔物に対する警戒ではなく、暗闇そのものの自体への警戒だが。

「・・・むこうに、明かりが見えますね・・・行ってみましょう」  
ルークの目の先には、確かに明かりがあつた。それは壁にあるランプの明かりなのか、アスカ達以外の誰かが持っているランプの明かりなのか、まだわからないが確かにそこで光っている事には間違いなかつた。

恐る恐る近づいてみると、壁にあるランプが辺りを照らしていた。  
なぜか、ここから先はランプが壊されでは、いなかつた。

「なんで、ここは壊されてないんだろうねえ・・・誰かが意図的にやつたとしか思えないよねえ」

ハロルドの言葉に誰も反論しなかつた。いや、しなかつたのではなく、できなかたのだね。そう考へざる負えない状況なのだから。  
「でも、ここから先のランプが壊れてないってことは、ここから先になにがあるってことなんじゃねえの?」

「ええ、その可能性は十分ありますね。もしかしたら、白いコート

について何かわかるかもしません

「よし、先へ進もう！！」

数十分ほど歩き��けていると、明かりが、一層増した部屋へとたどり着いた。

「なんか、ここ知っている気がする・・・」

「えつ？」

「いや、なんでもない」

アスカがボソッと口にした言葉が引っかかるクレアだが、あえて聞かなかつた。

奥に何やら、大きなものがあつた。ハロルドがそれに気が付き、一同は、駆け寄つて行く。

「・・・・・これはっ！！」

「どうしたんだ？ 何かわかつたのか？」

「これは、おそらく封印の像です。これは推測ですが、魔王アシュードの魂が封印されていた可能性が極めて高いです。それは、この魂の鎖から推測されます」

「魂の鎖？」

「はい。これは特定の人物の魂を縛りつけ、封印すると言つ、古来に存在した封印術に使用する道具です。この封印術は、魂と肉体と魔王アシュードの場合は『魔力』ですかねえ、とにかく、封印する対象の最も発達したものの、3つに分けてからそれを封印するんですよ」

「なるほどねえ・・・それじゃあここには、魂が封印されてて、他の場所に、肉体が封印されてたんだ。しかも、この様子だと、魂の封印は解かれているねえ。魂の封印が、解けてるつてことは、少なくとも肉体も復活してる可能性が高いよねえ」

「はい。つまり、この世にはあの恐ろしい、魔王が蘇つてしまつたと言う事です。しかし、彼の魔力は、蘇つているかはまだわかりませんね。封印が解かれたのは最近のようですし。しかも、魔力の封

印の仕方は、私も知りませんし、対策を練るにも練れません。困りましたね・・・

ルークとハロルドで、難しい会話しているのにアスカとクレアは理解できず、途方にくれていた。

「なんか、2人が違う次元の人見えてきたよ。すごい深刻なのは伝わってくるんだけど、意味がイマイチわからないよお・・・」

「ハロルドって、時々すごい奴見えるよなあ。いつもは、子供っぽいのにさつ」

アスカ達が、ルークとハロルドの会話をボーッと聞いていると何かがいる気配を感じ、咄嗟に横へ回避した。

すると、大きな岩の塊のような巨人が手に大きな棍棒を持ち、それを振り下ろしてきた。間一髪避けていなければ、今頃アスカはペシヤンコになっていたろう。アスカは体勢を立て直し、剣を即座に構えた。

第三十九話「魔物」（後書き）

次話「新技」

## 第四十話「新技」

「あつぶねえーなあコノヤロウー！」

「こいつは、ゴーレムですね・・・。それにしてもアスカ、よく避けましたねえー。私はもうてっきり、潰されてしまったかと思いましたよ」

ルークが嘲る様に笑った。アスカは、「あつそつ」と言わんばかりの表情を浮かべた。

「いくぜえー！」

勢いよくアスカが前へ飛び出し、ゴーレムの懷へ飛び込んだ。

「食らうとけ、『龍波』！！！」

アスカの正義の魔力が、竜王の刃から放たれる！・・・が、アスカの龍波は、ゴーレムには効かなかつた。

「こいつ、見かけ通りすっげえ硬いんですけど、どうするんだルーク！！」

アスカが溜め息を吐きながら、ルークに尋ねた。

「今私は、このゴーレムから逃げる作戦を考えたのですが、そういう訳にはいかなくなりました。見てください、彼の背中を」  
ルークに言われたとおりに、見てみるとゴーレムの背中には、マジックストーンがくつ付いていた。  
「もしかして、マジックストーンって、なかなか見つからないんじやなくて、なかなか取れなかつた・・・いや取る事ができなかつたんじゃないのかな？」

「たぶん、そうだろうなー！」

アスカがゴーレムの攻撃を防ぎながら、クレアに答えた。

「クレア、ルーク、援護頼むー！」

「了解ー！」

2人同時に返事を返した。

「集え水よ、今一つとなりて、その恐ろしさを見せつけよーー！」ス

「プラッショ』！…

「集え光よ、今一つとなりて、彼の者を貫き給え！…『ライトアロ

ー』！…』

水が勢いよく、宙を駆け抜け、『ゴーレムにダメージを与えた。そこへ、クレアの放つた光の矢がゴーレムを貫いた。

「ぐおおおおおおおおおお…！」

ゴーレムが地響きのような、声を上げた。

「倒したのか？」

「いやまだですっ！…！」

「炎よ、我が剣に宿り、その力を貸し『えよ…！』フレイムソード』

！…』

ハロルドが、自らの呪文で、剣に炎を宿し、『ゴーレムに斬りかかつた。

「だああああああー！」

ハロルドの攻撃によつて濡れていたゴーレムの体は急に乾燥し、それにより崩れやすくなつた。

「今だよ、アスカ！…今ならこいつの体も脆くなつて倒しやすいはずだよ！…！」

「そんなこと言つたつて、硬すぎて龍波が効かないんだ、どうしようもないだろ！…！」

「龍波をもつと、一点に集められればいいんじゃないかな…？…？」

クレアの一言で、あることをアスカは思ついた。

「そつか、龍波の魔力をもつと一つに集めて鋭くすれば…？…」

そう呟くと、アスカは7、8歩後退し、勢いよくゴーレムに突進した。

「食らいやがれ！…『龍波衝』！…！」

剣でゴーレムを突き刺すように、剣を前突き出した。すると、今まで拡散していた魔力が、一点に集まりゴーレムの体を貫いた。

「ぐおお…がああ…おおおおおお…？…？」

ゴーレムが崩れるように倒れた。

「へつ……どんなもんだ！！」

アスカが誇らしげに言つた。それを見たルークは、少しあつけに取られた。

「この短時間の戦いの中で、新たな技を自ら生み出すなんて・・・この子はもしかすると恐ろしく強くなるのでは・・・」

こうして、見事にアスカ達はゴーレムを倒すことができたのだった。

第四十話 新技（後書き）

次話へ 命

## 第四十一話 命

「ゴーレムを倒したことによりマジックストーンを得ることが出来たアスカたちは、とりあえずそれを持っていつたん外へ出ることにした。

今回入手したマジックストーンは、量から見れば、課せられたノルマを十分満たすものであった。

「これだけあれば、十分だよねえ」

「ええ。予定より早いですが、これで任務は完了です。今日は町の宿屋に泊まって、明日マジックストーンを本部まで届けましょう」そんな会話を交わしながら、外へ向かって歩いていこうとしたアスカたちだが、ふとクレアがその場で足を止めた。

「どうしたんだ、クレア」

アスカが聞くと、クレアは崩れ落ちたゴーレムの後ろのほうを指差した。

「あれ・・・人の死体じゃない?」

その方向を見てみると、確かにそこに人らしき姿のものが、うつぶせに倒れているのが見えた。

それは二つあった。

「もしかしてさつきクレアちゃんが言つてた、行方不明者の人たち？」

ハロルドが呟いた。

四人はとりあえずそちらの方まで行つてみた。

「あっ、あのぉ・・・大丈夫ですか？」

クレアが真っ先に駆け寄つて声をかけた。

しかし、それはまったく反応を示すことはなかつた。

もう一人のほうも、ぴくりとも動かない。死んでいるのは間違いないだろう。

その証拠に、その体は赤黒い血にまみれていた。

「とりあえず町まで運びましょう」

ルークの言葉に従い、アスカとハロルドが一人ずつ背負い、町まで運ぶことにした。

結果から言うと、その二つの遺体は、やはり発掘者と用心棒の、行方不明になった二人組みだつた。

町の役場まで運び、命からがら逃げ出した弟子の人確認を取つてみたのだ。

弟子は発掘者の方の遺体に縋り、号泣していた。

師匠、と何度も何度も繰り返し言いながら、決してそのそばを離れようとしなかつた。

「・・・・・」

アスカは無言でその様子を見ていた。

弟子の悲しみように、人の命の重さというのを感じたような気がしたのだ。人一人が死んだだけで、これだけ悲しむ人がいるということに。

そしてもうすぐ、人の命を大量に奪うことになる戦争が始まる。

「アスカ？」

黙り込んでしまったアスカに、心配そうにクレアが声をかけた。

「どうしたの？」

「あ、いや、何でもねえよ」

アスカは出来る限り平静を装い、笑顔でクレアに言った。

「よし、それじゃあ宿を探そうぜ！」

アスカはつとめて明るい声を出しながら、ルークとハロルドのほうへ歩いていった。

第四十一話 命（後書き）

次話『臨時休暇』

## 第四十一話／臨時休暇

「ンンンン……」

「開いているよ。入りなさい」

「失礼します。マジックストーンの採取に成功しました」

「すまないなあ。こっちも人手が足らなくてね」

「いえ、構いませんよ。命令ですからね」

「ん？ アスカ君。その剣を見せてくれるかな？」

突然のことには、アスカは少し戸惑つたが言われるままに剣を渡した。

「だいぶ剣の刃がこぼれているね」

「は、はあ・・・」

「ここへ行つてみなさい。ここには優秀な鍛冶職人がいる、この手紙を渡せば無償で剣を鍛えてくれるはずだ」

「えつあ、はい。わかりました」

「それと、これを持つて行きなさい。きっと、役に立つだろう」

そう言つてダーヴァは、先ほど手渡したマジックストーンの欠片をアスカに渡した

「あつありがとうございます」

「なに、気にすることはない。これは報酬だだよ。はつはつはつはつはつはつは」

なんなんだ、このオッサンは…… そう心の中で呟くアスカであつた。

「戦争まであと一週間をきつた。各自準備を怠らずにな。それから戦争の前日まで君たちには休暇を与える。家に帰つて事情を話すといいだろ？ もつともクレアちゃんとハロルド君は戦争に参加する義務はない。戦争が終わるまで実家に帰つても構わない。命は大切にしなくてはな」

「失礼ですが、俺には帰る家はありませんよ」

ハロルドは笑顔で答えたが、そこには温かみはなかった。

「あの、私も参加させていただきます！－！アスカだけ行かせるなんて心配で心配で・・・」

「クレア・・・」

アスカは少し嬉しかった。人にこんなにも思われているんだという事を実感できたからだ。

「はつはつはつはつはつは。そつか、ならば君たちの活躍と健闘を祈らせてもらうとするよ」

「ありがとうございます。では、失礼させていただきます」

「おつと、大事な事を言つて忘れていたよ。前日の正午に作戦会議を始めるのでな、それに間に合つようにしてくれたまえ」

先に言えよ・・・全員が呟いた。アスカの顔は心の声があふれんばかりの表情をした。

「あのおつさん、わけわからんねえーよ・・・なんか精神的に疲れるわ」

「まあいい人なんだけどね。謎なところが多いよね」

「昔はもつと鬼のような人だつたんですがね、ここ数年で穏やかになつてしましました。それより、アスカの剣を鍛えてもらいに行きましょう。あまり時間もありませんし、急いだ方がいいですね」

「そうだな、よし鍛冶屋さんに向かおつ－！」

第四十一話「臨時休暇」（後書き）

次話「鍛冶屋」

## 第四十二話 鍛冶屋

その鍛冶職人の店は、サンライトタウンの西端にひつそりとたたずんでいた。

都会的なこの都市において、そこだけが異様な雰囲気を醸し出している。

鍛冶職人の店は森の中にあつたのだ。

ただ森といつてもそれほど大きなものではなく、せいぜい普通の家の敷地よりやや広いぐらいの面積だ。

そこにびっしりとほとんど隙間なく、木やら草やらがぼうぼうに生えていて、店に入り口に続く道以外は、ほとんど森いや、ジヤングルといつてもよい状態であった。

この都市において、こんな奇妙な建物は他にないだろう。アスカたち四人はその店の前でしばし呆然としていた。

「なんだよ、このジャングルみたいな感じは……」

「噂ではその鍛冶職人は変わり者であるとのことでしたが、ここまでは……」

流石のルークも、この景色には開いた口がふさがらないようだ。

「とりあえず、中に入つてみようよ」

クレアの言葉に、四人は余り気が進まなそうにしながらも、木々に囲まれた入り口への道を、歩き出した。

「お話をダーヴァ総司令官から聞いています。どうぞこちらへ」

店に入ったアスカ達を迎えたのは、意外にも若い女性だった。

女性の割には背が高く、背筋もしゃんと伸びた、しつかりしていうな感じの人だ。

「あの、あなたがこここの鍛冶職人さんなんですか？」

クレアが聞くと、その女性は微笑んだ。

「とんでもありません。私などまだまだ未熟者です。私はここの鍛冶職人の弟子なんです」

「お弟子さん、ですか」

弟子であるといつことは、彼女も鍛冶職人を目指していくといつことである。

鍛冶職人はほとんどの場合男性があるので、四人は目を丸くした。

「そういうえば、あの庭なんですか……」

「ああ、見てもらいました？ 師匠は自然を愛する方ですので、私が師匠のために庭にたくさん植物を植えたんです。喜んでもらえると思つたんですけど、師匠はちょっと呆れたように私を見てくるんですね。何故でしょ？」

そりや、自分の店の庭をあんなジャングルみたいにされたら呆れもするだろ？

どうやらこの女性、しっかりしてこるよつて見えてどこか抜けているらしい。

「あ、では師匠を呼んでまいります」

その女性はアスカたちに一礼すると、店の奥へと歩いていった。

第四十三話　鍛冶屋（後書き）

次話「新しい剣」

## 第四十四話／新しい剣

「待たせたの。わしがこここの鍛冶職人のオレーグじゃ」

店の奥から出てきたのは、年配の老人だつた。

おそらく70は超えているだろうと思われるが、顔つきが鋭く、精力に満ち溢れている感じで、歳を感じさせない。

「先ほど対応させたのがわしのたつた一人の弟子、ローラஜやが、何か粗相はしていいのか？」

「いえ、とても暖かくもてなしていただきました」

「それはよかつた。では早速、その問題の剣を見せてくれ」

オレーグに言われ、アスカがその剣を差し出す。

オレーグは差し出された剣に顔を近づけ、それを観察する。  
「ふむ、いい剣じゃな。刀身が滑らかで、美しい光沢を持つてある。だがやはり、少し刃こぼれしているようじゃな……。分かった。少し待っていてくれ。そうじやの、数時間で終わるじやろ。それまでどこかで時間をつぶして待つてくれ」

オレーグはそう言つと、アスカたちの返事も待たず、足早へ店の奥へと消えていった。

急ぐようにして行つてしまつたオレーグに、アスカたちが驚いていりど、「師匠つたら、骨のありそうな剣を見つけると、いつもああなんですよ」

と、今まで脇に控えていたローラが苦笑混じりに言つた。

「では、師匠の言つとおり、終まるまでには数時間かかるでしょうから、それまでどこかで暇でもつぶしていてください」

ローラが立ち去つとした時、アスカがある事を思い出し道具袋を出した。

「ローラさん、これをオレーグさんに渡してもらえますか？」

そう言つてアスカは、ダーヴァから渡されたマジックストーンの欠

片をローラに手渡した。

「わかりました。渡しておきます。では、私も師匠を手伝うのでこのへんで」

そういうと、ローラもオレーグを手伝つために、店の奥へと消えていった。

オーレグの家を後にした一同は、剣が出来上がるまでの時間潰しについて話し合つていた。

「どうするよ？ この中途半端な時間」

「そうですね、あまり遠くへはいけませんし・・・」

「やっぱり、この町を見て回るのが一番いいと思つただけど~」

「俺も、クレアちゃんの意見に賛成かな」

「・・・そうですね。アスカの剣が鍛え終わるまで自由時間とします」

「うう」

そう決まつたとぼ同時にハロルドはどうとかへ行つてしまつた。

「あいつ元気だなあ～～」

アスカが微笑むように笑うと

「へえ～、アスカもそんな顔するんだねっ！ 初めて見たよーー！」

クレアが笑いながら話しかけてきた。

「別に～。いつもどおりじゃねえ～か？」

「ふふつ そおかなあ？」

「なんか機嫌いいな、クレア」

「別に～～」

2人が楽しそうに会話していると、ルークが口を開いた。

「では、私も行きますね。私はホーリーナイツの本部へ戻りますから、何かあつたら本部へ来てください。それでは・・・」

「ああ、わかつた」

そつ言つと、ルークはスタスターと歩いていった。

どんな風に仕上がるのか少し楽しみだな。俺の新しい剣・・・

アスカは少し胸に期待を持ちながら口を開いた。

「とりあえず、街の方に行つてみるか

「うんっ！！」

2人は、町へと歩いていった。

第四十四話「新しい剣」（後書き）

次話『魔龍』

## 第四十五話「魔龍」

「ねえ、アスカ。私洋服が見たいんだけど」「ああ？この間買ったばかりじゃんか？」  
「いいから、いこつ！！」

そう言うとクレアはアスカの腕をグイグイと引っ張った。  
「わかつたわかつた。引っ張らなくてもちろんとついて行くから」「早く早くつ！！！」

いつもやつてクレアと遊んだり、笑つたり、話したり、一緒にいたりするのでこれで最後になるかもしねりい・・・。

そう考えると切ない気持ちで心が溢れ返つてしまい、アスカの顔から少ししづつ笑顔が消えてつた。それはクレアも同じであつた。  
その後、洋服を見に行つたアスカ達は、食事をとり街を見て回り日が暮れるころにオーレグの家へと戻つてきた。

「遅いよ～、アスカ君。クレアちゃん」「人を待たせるのは、感心しませんね」「ゴメン、ちょっと遠くまで行き過ぎた！！」「ごめんなさい。私が無理を言つたから・・・」  
反省する2人を見てルークが口を開いた。  
「まあ、いいでしょう。さつ、中へ入りましょ  
う」「おう！～！」

「お待ちしておつました。作業の方は完了いたしました！！師匠もなかなかのできだと言つております」「忙しい中、申し訳ありませんでした」「いえ、お気になさらいでください。それより、師匠がお呼びです、じちぢりへどうぞ」

ローラに導かれ、オーレグのいる部屋へとアスカ達はやつてきた。

「剣はできたぞ。そこにある箱にしまってある。開けてみるといい」

言われるままにアスカは、ふたを開け中身を取り出した。

「これが。俺の新しい剣・・・」

アスカが鞘から剣をゆっくりと引き抜くと鈍く光る鋭い刀身が見えた。

「そいつあ、前の剣よりも軽量化して一振りの反動を少なくした。

前よりも早く動けるだろう。ただ、剣自体のパワーと強度は落ちてから剣に頼った攻撃、防御は避けるんだ。剣で攻撃を防ぐんじやない、体全体で避けるんだ。でないと簡単に折られる。いいな?」

「おう!・・・」

アスカは、軽く一振りほど剣を振るとゆっくりと剣を鞘に収めた。

「おっと、大事な事を一つ言い忘れてた」

「ん? 大事な事?」

「そうだ。その剣の柄と刀身に『マジックストーン』を埋め込んでおいた」

「だからどうなんだ?」

「マジックストーンは吸収した魔力を増幅させる增幅器のようなものだ。つまり、今までの龍波から放たれていた魔力が増幅され、さらに強力な龍波が打てるようになったという事だ」

「なるほど。それで総司令官はこれを・・・」

ルークが口開いた。どうやらマジックストーンを託した意図が掴めていなかつた様だ。

「最後に、その剣の新たな名だが・・・」

「竜王じゃないのか?」

「マジックストーンによつて魔力を肥大化させる剣。よつてその剣を『魔龍』と称す!・・・」

第四十五話『魔龍』（後書き）

次話『故郷』

## 第四十六話「故郷」

「さて、ではこれからどうしますか？」

オーレグによつて剣を強化してもらつたアスカたちは、彼に礼をいい、店の外へと出てきていた。

あの不気味なジャングルを視界に入れないよう努めながら、四人はこれから行動について話し合うことにしたのだ。

「休暇はあと四日ほどありますけど」

「ダーヴァさんは、家に帰つてみると」「って言つてたよね」

クレアの言葉に、アスカは故郷の風景を思い出していた。

砂漠の町、サンラド。

時間としてはそれほど長くはないはずなのに、そこで暮らしていきたころがひどく懐かしく感じた。

残してきた母は、そしてロベルトはどうしているだろ？ アスカを庇い、片腕と共に自らの夢を失つたロベルト。 彼にもきちんと今までのことを、報告したい。

「俺は、帰りたい。サンラドに」

アスカははつきりと言つた。

クレアはにつこりと笑い、「私も！」と同意した。

「人が生まれ育つた町かい。興味あるし、俺も行く！」

クレアの横で、「はいはーい！」と手を上げながら、ハロルドが言った。

アスカはあわてて口をつぐんだ。

「じゃ、じゃあ、ルークはどうする？ 自分の故郷に帰る？」  
少し気まずくなつた雰囲気を打破するために、クレアがわざとらだ。

しいくらいい明るい声でルークに聞いた。

クレアに聞かれたルークは、につこりと満面の笑み（例の嫌味なやつ）を浮かべ、言った。

「アスカ達についていきますよ。私の両親もすでにこの世にはいませんから」

せつかくその場を取り繕おうとしていたのに、何でこの人はこんなにも笑顔であつたりと地雷を踏むのだろう。

アスカは少し頭が痛くなつた。

「それに、ロベルトにも会いたいですね」

「ついでかよー！」

思わずツッコミを入れたアスカだった。

ジャリッジャリッ・・・ 砂を踏みしめる音と吹き付ける突風が行く手を阻むこのサンラードの地にアスカ達はいた。

「やっぱ、砂漠は大変だな。暑くて暑くて・・・」

「そうだね、いくら地元の人でも暑いものは暑いよね」

「もう暑いのヤダ～！暑いのうづざーい！！」

「まあまあ、そう言わずに。だいたい、あなたがついて行きたいと言つたのですよ。ハロルド」

「ただけど・・・やっぱ、暑いのはイヤだー！」

暫く歩き��けていると、町が見えてきた。

「おっと、どうやら着いたようですよ」

「ここに来るの、久しぶりだな」

第四十六話「故郷」（後書き）

次話「異変」

## 第四十七話／異変

ジャリッジャリッ・・・ 砂を踏みしめる音と吹き付ける突風が行く手を阻むこのサンリードの地にアスカ達はいた。

「やっぱ、砂漠は大変だな。暑くて暑くて・・・」

「ねつだね、いくら地元の人でも暑いものは暑いよね」

「もう暑いのヤダ〜！！暑いのうつざーい！！」

「まあまあ、そう言わずに。だいたい、あなたがついて行きたいと言つたのですよ。ハロルド」

「そうだけど・・・やっぱ、暑いのはイヤだ！－！」

暫く歩き��けていると、町が見えてきた。

「おつと、どうやら着いたようですよ」

「ここに来るの、久しづびりだな」

町はもう、目と鼻の先だというのにアスカが突然立ち止まつた。

「少し寄りたい所があるんだけど・・・」

「？」

「無理ならいいんだ。ちょっと寄りたかっただけで用は無いから・・・」

・

「・・・そうですか。では、病院へ行きましょう。まだ、ロベルトは入院しているはずです。おそらく、病院で解散という形になると思ひます」

一向が歩き出そうとした瞬間、アスカが頭痛を片手で抑え込むかのようにうずくまつてしまつた。

「うああ、あああーーい、いてえつ・・・！－！」

それは、尋常な痛みではなかつた。アスカはそのまま意識を失つた。

「・・・んつ、んん、こ、こはどこだ・・・？」

あたりを見回せども真つ白な世界が続く。ビコからか声が聞こえて

く。

・・・もつしだ・・・やつと、外へ出れる・・・

「何の事だ？お前は誰だ？」

・・・もつ、こんな所には居たくない・・・早く帰りたい・・・

「うひ、答えろ！…」

「・・・ねえパパ、アスカ大丈夫かな？」

「ああ、命に別状は無いようだ。心配ないよ、クレア」

アスカが倒れた後、ルークたちは病院へと急いでアスカを運んだようだ。この病院はクレアの父が経営していてロベルトもここに入院している。

「何か原因はわかりませんか？」

クレアの父は難しそうな顔で答えた。

「身体に異常は見当たらぬんですよ。むしろ元気なくらいで。疲労が溜まっていたわけでもなさそうなんだが・・・」

「砂漠越えで太陽にやられたとか？」

「日射病などでもなさそうなんだよ。ただ・・・」

「ただ・・・？」

クレアの父は、言葉をくもらせた。

第四十七話／異変／（後書き）

次話／『型』／

## 第四十八話「型」

「気になることが一つあってね」

「気になること……ですか？」

その場にいた一同は、唾を飲んだ。喉を鳴らしながら。

「はい。さつきの診察の時に精密な検査を行つたのですが、この子の魔力の……この子の魔力の型タイプが現在では有り得ない型タイプなんですよ」

「型タイプ？」

クレアが言つとルークがいつものように説明した。

「型タイプと言つのはですね、簡単に言うと魔力の性質のようなものですかね？人や動物、魔物は必ず体内に魔力を宿します。魔力は、身体の活動には必要不可欠でありなくなれば死に至ります。これは知っていますね？」

ルークは確認を取りながら説明した。説明が難しいと考え丁寧に説明しようと思ったのである。

「魔力には、組み合わせというものが存在します。それはそれぞれで異なり、まったく同じ組み合わせのものは存在しないといわれています。双子などでもその組み合わせが一緒になることもあります。不思議な事にその組み合わせは過去にも存在しないようです。」

「なんか途方もない話だね……」

「まあ、事実ですから仕方ありません。では、説明を続けます」「まだあるの？」と言わんばかりの表情をクレアは浮かべた。

「組み合わせの要因としては、魔力の色（Color）、魔力の形状（Type）などいろいろあります。私も詳しく知っているわけでもないのでここでは、色と形状の説明だけしておきます。詳しい事が知りたければ自分で調べてください。資料なら貸しますので。

「セルフなのね……（笑）」

「

「魔力の色というのは、以前話したと思いますがそのままの意味で魔力の色を示します。その色を調べる方法は以前話したやり方や最近では医薬品でも調べられるようです。色は人それぞれ異なります、例えば私なら金色ですが、一口に金色といつてもそれぞれ個性を持ちます。それは明るかつたり、暗かつたり。眩しく光つたり、鈍く光つたりと様々です。つまり、似ている色があれどもまったく同じ色になることは無いのです」

「・・・な、なるほど・・・」

「次に魔力の形状ですが、現在では大きく3つに分類する事が出来ます。1つ目は、刃物のような鋭い形状です。これは、魔術や呪文の発動にはあまり適しません。アスカのような戦い方の人には適しています。今現在の一般の方はこの形状の方が多いようですね。2つ目は、球体のような形状です。これは魔術や呪文を発動しやすく、アスカのような戦い方もできるオーソドックスな形状です。私もこの形状です。最後は、紙のような形状です。これは珍しく、個性をもちます。攻撃にも優れ、治癒にも適します。クレアはこの形状ですね。現在ではこの3つの形状が存在します。色と同じで形状も人それぞれ異なりますが見分けがつけられる程度で分類できます。昔は他にも形状があつたようですが、現在では失われた形状のようです」

ルークがやつとながい説明を終えて一息つくとクレアの父が口を開いた。

「・・・しかし、アスカの魔力の形状は異常な形状をしているんだ。基本は刃物の形状なんだが、他の形状も入り混じっているんだよ。この子が幼い頃に検査した時にはこんな形状はしていなかつた。つまり、この子の魔力の形状は変化していることになる。少しづつ、少しづつね」

「てことは、新種？」

クレアは驚きながらも冷静を保った。

「いえ、新種ではありません。昔はこの形状もあつたようです。た

だ、普通は一種類までしか組み合わさらないみたいですが、稀に三種類以上が混合している場合もあるそうです。ですが三種類以上の混合は、ほんの数名しか確認されていないそうです

「書物には、これらの形状を混合体と呼んでいたと記されている」

「でも、失われた形態なんでしょう？」

「はい、そのとおりです。前に読んだ資料には魔王アシュードが最後の混合体であつたと記されています。それ以降の確認はありません

「じゃあ、なんで？」

「混合体は、混合体からしか生まれません。つまり、400年以上前に生まれていなければ混合体の誕生は有り得ませんね。しかし、アスカの誕生はここ最近です。・・・まったく、わかりませんねえ。」

「まったくです。」

今回ばかりはルークもお手上げのようだ。

「・・・くく、もうちょいだ・・・」

後ろでハロルドが不気味な笑みを浮かべた。

第四十八話 型（後書き）

次話『不安』

## 第四十九話／不安／

・・・さあ、私を解放しろ・・・

「何言つてんだよ、お前は一体・・・？」

「うわあつーーー！」

「きやあつーーー！」

横で寝ていたアスカが突然跳ね起きた為クレアは驚いて叫んでしまった。

「こーは、俺の部屋か・・・？」

「びっくりしたあー。もうお、いきなり起きないでよ

「俺は一体・・・？」

「頭痛いーって言つて倒れちゃつたんだよ。でも、なんともないから大丈夫だつて言つてた」

「そつか、俺倒れちゃつたんだ。」

「うん、でも元気そうでよかつたあー。あのまま死んじゃつたらどうしようかと思つたよ」

「こんなところで死んでたまるかよ。」

「ふふつ。そうだね」

「あつ、俺ちょっと出掛けてくるわ

「えつ？もつ夜だよ？」

「朝には帰るからーーー」

そう言つてアスカはクレアを一人部屋に残して飛び出していった。

「ああー、やつぱ夜は冷えるなあ。ああ、さみイ」

アスカは一人あのお氣に入りの場所に来ていた。

さつきのあの夢はなんだつたんだね。解放しろつていいたい。  
それに・・・なにかとも禍々しいものを感じたな。

「やつぱりこいつたあー」

振り向くとクレアが息を荒くして立っていた。

「なんだ、クレアか」

素つ氣のない態度にクレアは、ムスッとした。

「せつかく迎えにきてあげたのにその態度は無いんじゃない?」

「迎えに来いと言つた覚えはないけど~」

アスカは嫌味つたらしく言つた。

「じゃあもう帰るよ!!」

クレアは、すっかりスネてしまつたようだ。

「悪かった悪かった^^;」

慌ててアスカは、謝つた。それから暫くクレアに叱られたが気の済んだクレアがアスカの手をとり家へと向かつた。

「じゃあ、おやすみ。アスカ」

「ああ、おやすみ」

クレアと別れたアスカは、自分のベッドに入り先ほどの幻聴らしきものの言つた言葉の意味を考えていた。が、しかしアスカはもの1分も経たぬ内に寝入つてしまつた。

## 第五十話／珈琲

チュンチュン。小鳥の鳴り声が聞こえてくる。静かな朝の始まりを告げている。

「もう、朝か。さてと、今日は何するかな？」

重い体を起こしたアスカは、軽く伸びをした。ポキポキッ、ポキッ。背骨を鳴らしたアスカは、欠伸をしながら朝食を食べに1階の居間へと向かった。

朝食をとりおえたアスカが着替えをしていると母が呼ぶ声が聞こえた。

「アスカ――！お客さんよ――！」

「こんな時間に客人？誰だろう？ハロルドかな？」  
すばやく着替えを済ませ、玄関へ向かった。

「どちらさま？」

そう言いながらアスカは目の前のドアを開いた。

「やあ、アスカ君」

「なんだやつぱりハロルドか」

そこには、ハロルドがいた。

「どうした？なんか用か？」

「いや、なんか具合悪いみたいだから元気かな？って思つてさ」「どうやらアスカを心配していくてくれたようだ。ハロルドは、意外と気が配られる出来る子だ。

アスカは、ハロルドを連れて町を歩いて周った。

一方で。

「ルークさん。アスカの事なんんですけど……」

「なんですか？」

「この間の一件で彼の魔力の色も検査してみたんですが、それが…

・

「？」

ルークは、「コーヒーをすすりながら尋ねた。

「一体何が分かつたんですか？」

恐る恐るクレアの父は、口を開いてこう言った。

「魔力の色が黒なんです。真っ黒になっていたんですね。かつては暖かい紅色のきれいな色をしていたんですが・・・」

「！」

さすがのルークも驚きを隠せない。これは異常なことだとルークも分かっているからだ。

元来、生まれ持つた魔力の色が歳月を重ねるに連れて変色するなど有り得ないからだ。

「そんな事が起こるなんて有り得ない。いや、この時点で認めざるを得ないです」

「はい、しかもこの色は・・・」

追い討ちをかけるかのようにクレアの父は言った。

「アスカの型<sup>タイプ</sup>は書物に記されていた魔王アシュードの型<sup>タイプ</sup>と酷似しています」

「あ・・・。何がどうなればこんな事態が。頭が痛いです、さすがに」

「これから何が起こるかわかりません。大変申し訳ありませんがアスカからなるべく目を離さぬようにお願ひしても・・・」

「はい、わかつています。それが最善の策でしょう」

「・・・一体どうなっているんだ・・・」

ルークは、そう思いながら「コーヒーを飲みなおした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4608a/>

---

Eyes ~ アイズ ~

2010年12月25日22時21分発行